第 15 号

成寿

SEIJU

1990 秋 秀子

横浜 善光寺刊

拝啓　残暑きびしき折柄
御健勝のこと拝察いたします
「成寿」第十五号をお送り致します
今回は韓国佛教を特集しました
日韓関係が新しい局面を迎えた
年でもありますのでぜひお読みくだ
さいたくお願い申上げます
まずは取あえず申上げて挨拶と
いたします

合掌

平成三年八月吉日

善光寺住職　星野武志

各位

「忍辱こそ最上の行

くるしさをたえ忍ぶこそ

この上もなき涅槃なり」

諸仏はかく言いたまえり

まこと　出家にして

人をそこなうものなく

沙門にして

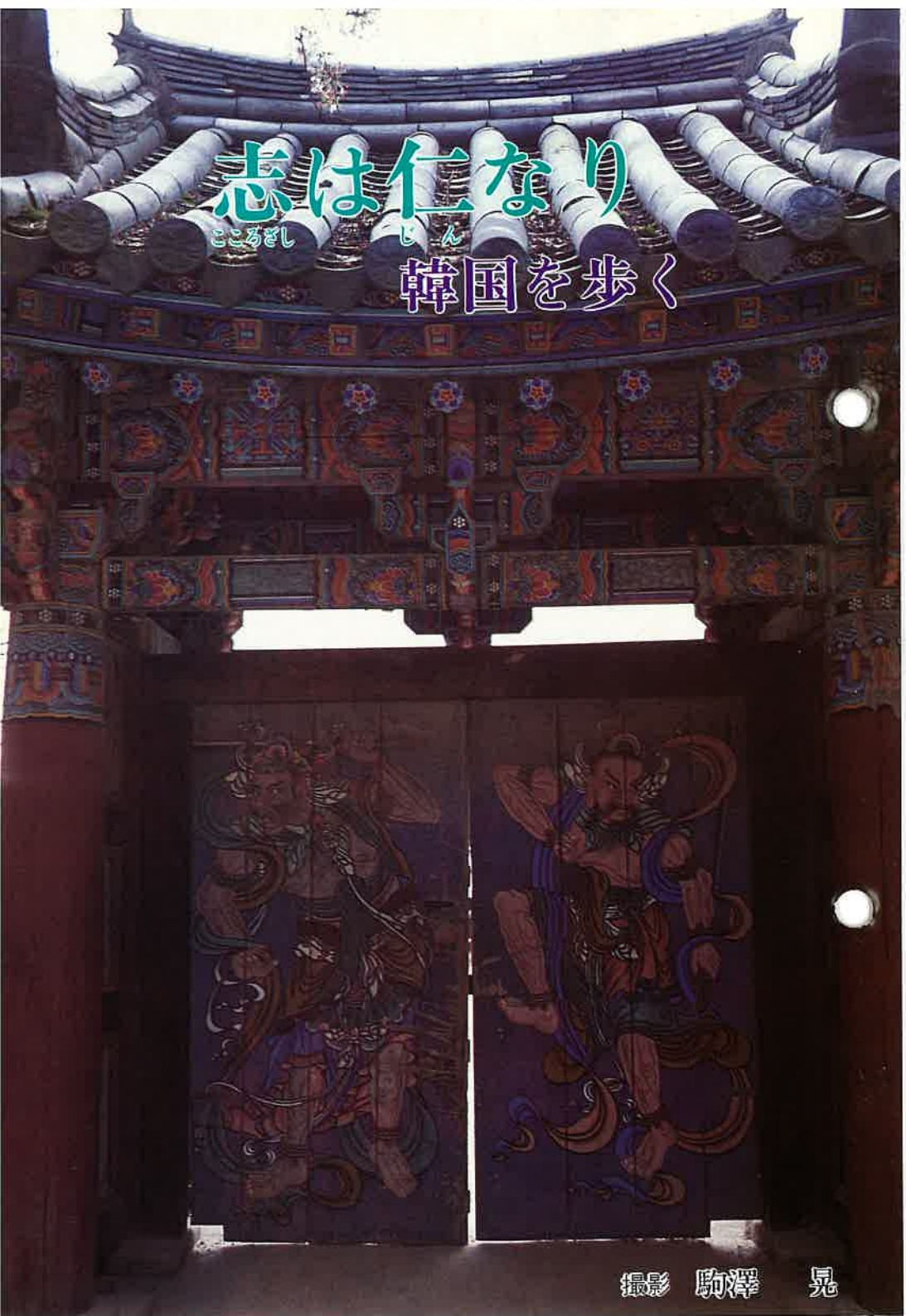
他を悩ますことなし

〈法句経〉

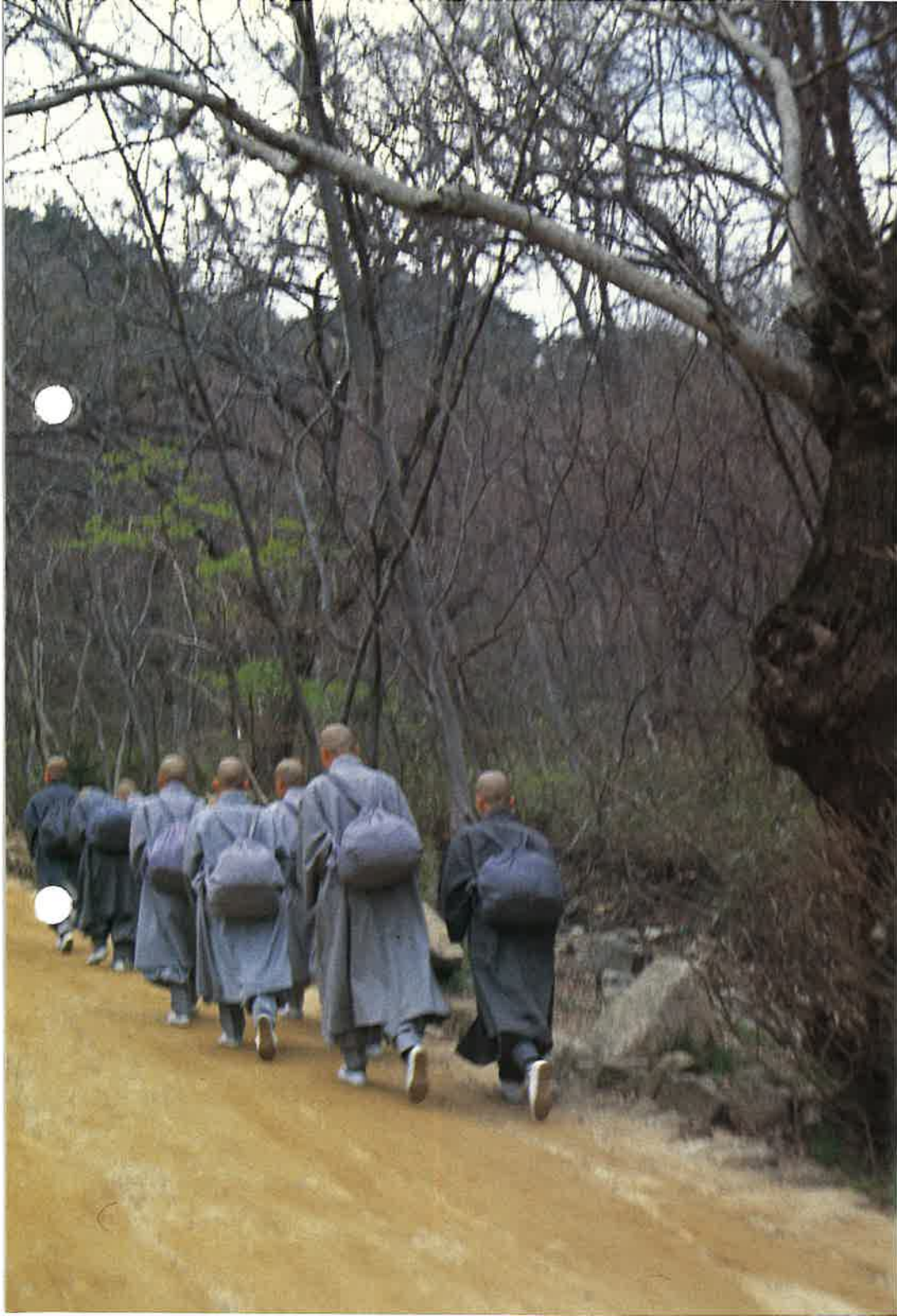
志は仁なり

こころざし　じん

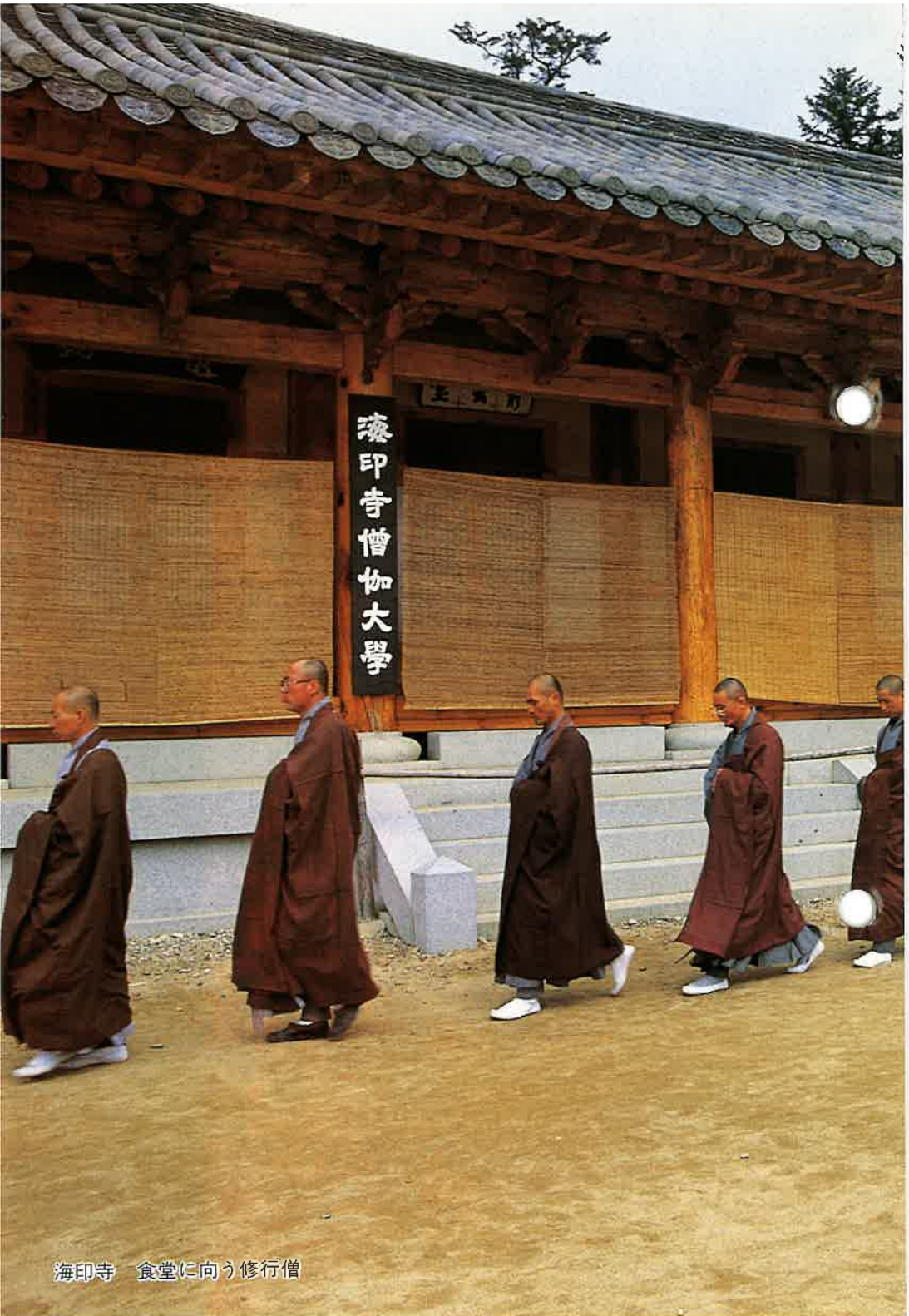
韓国を歩く



撮影　駒澤　晃

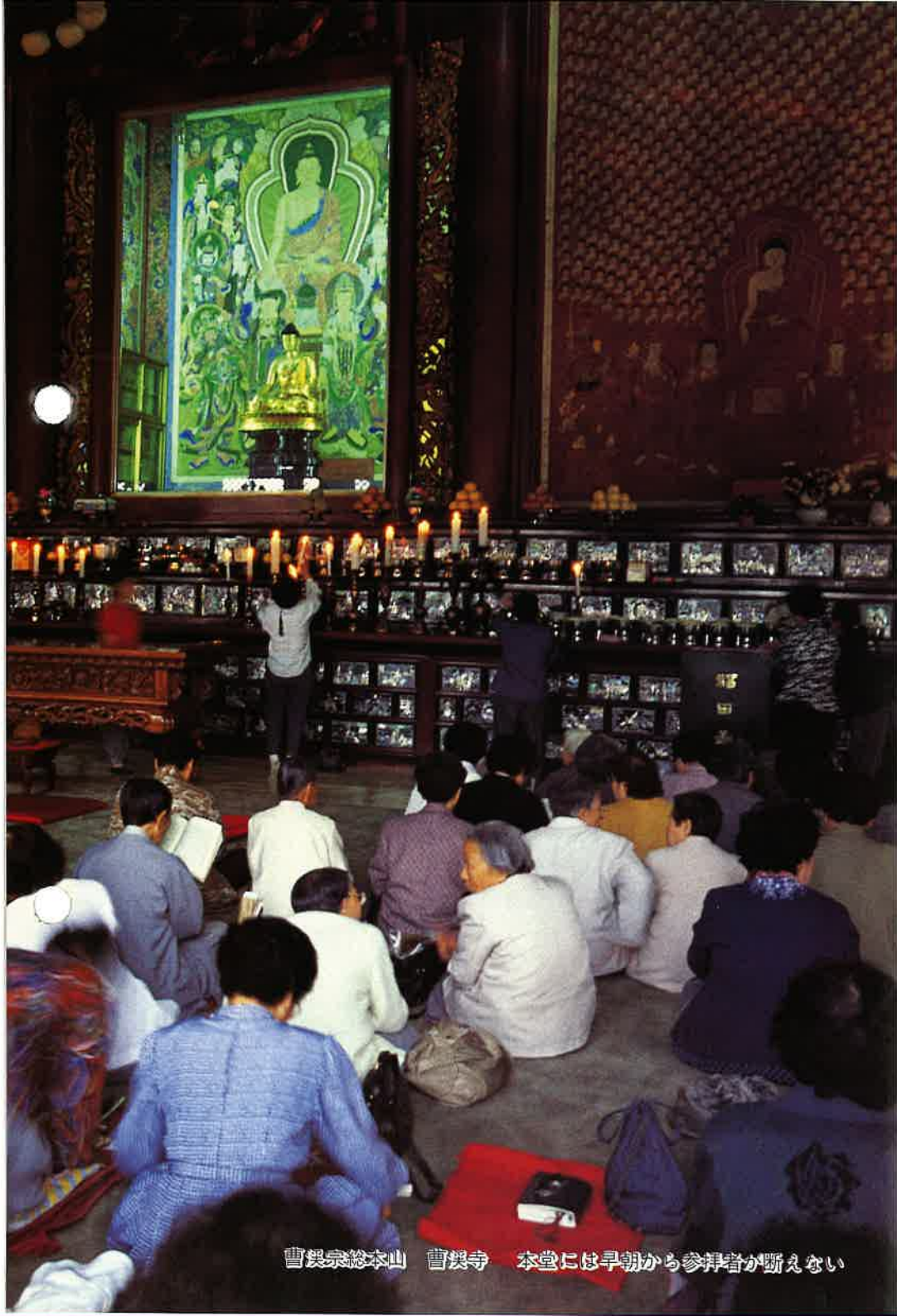


海印寺参道　上山する尼僧たち

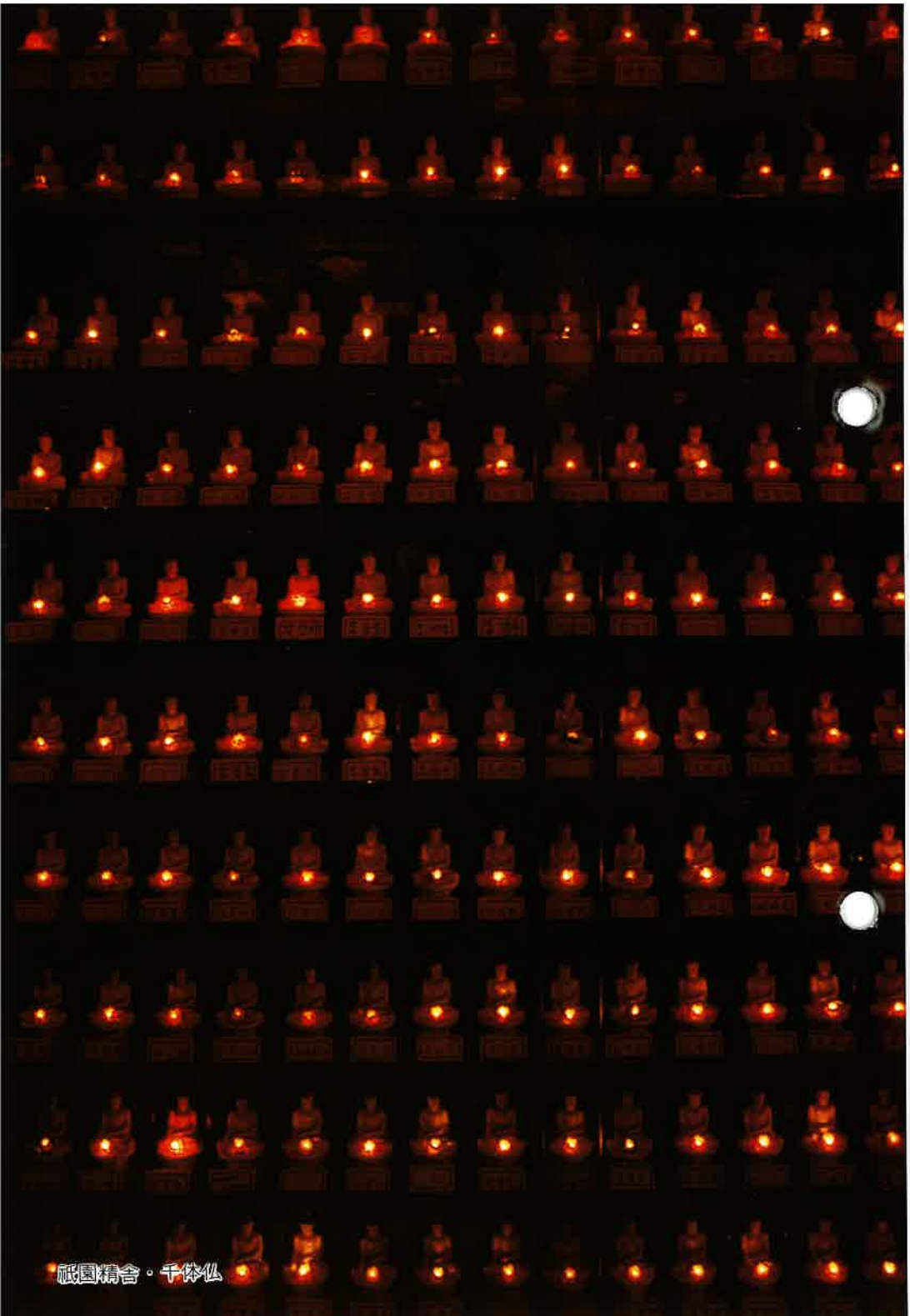


海印寺　食堂に向う修行僧

海印寺本堂



曹渓宗総本山　曹渓寺　本堂には早朝から参拝者が断えない

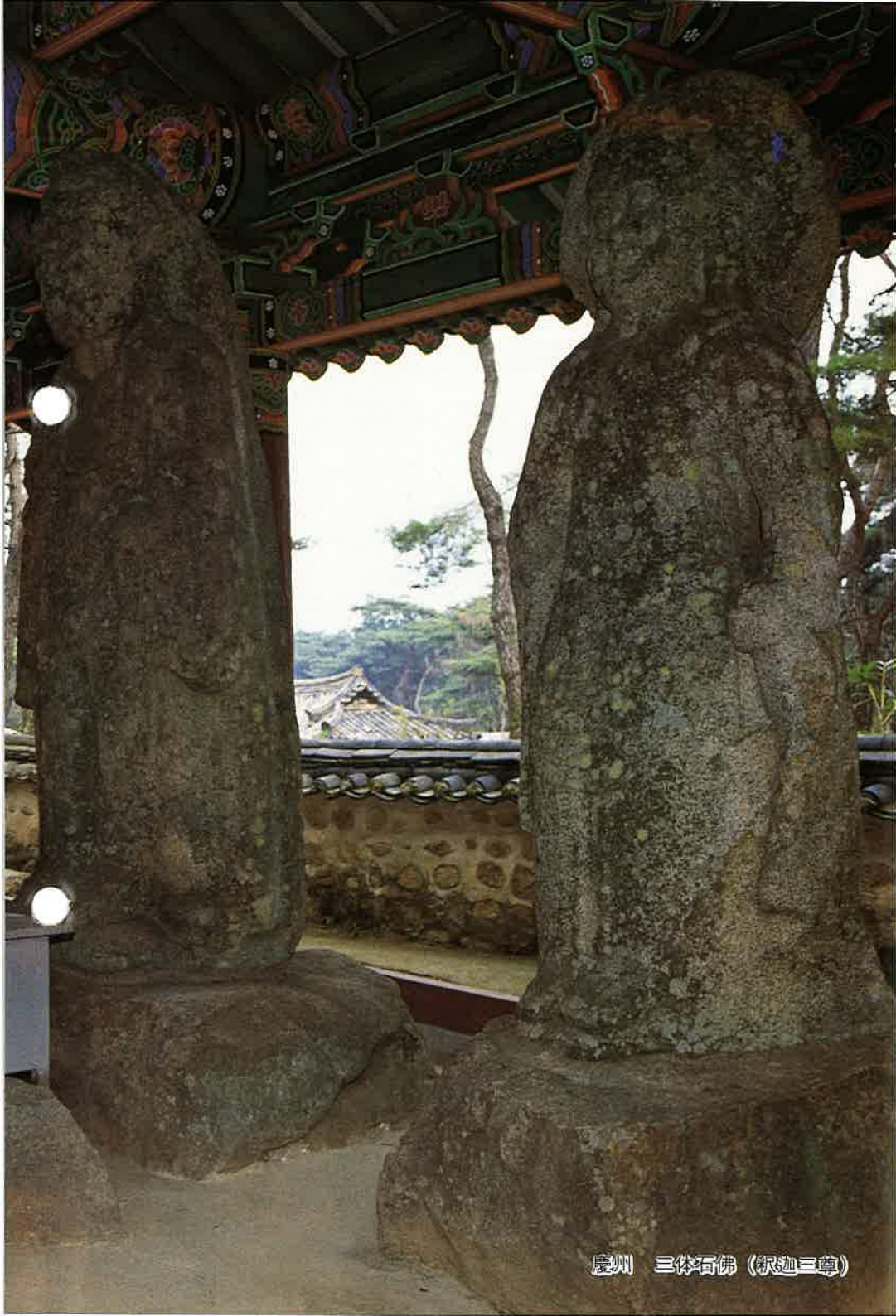


祇園精舎・千体仏

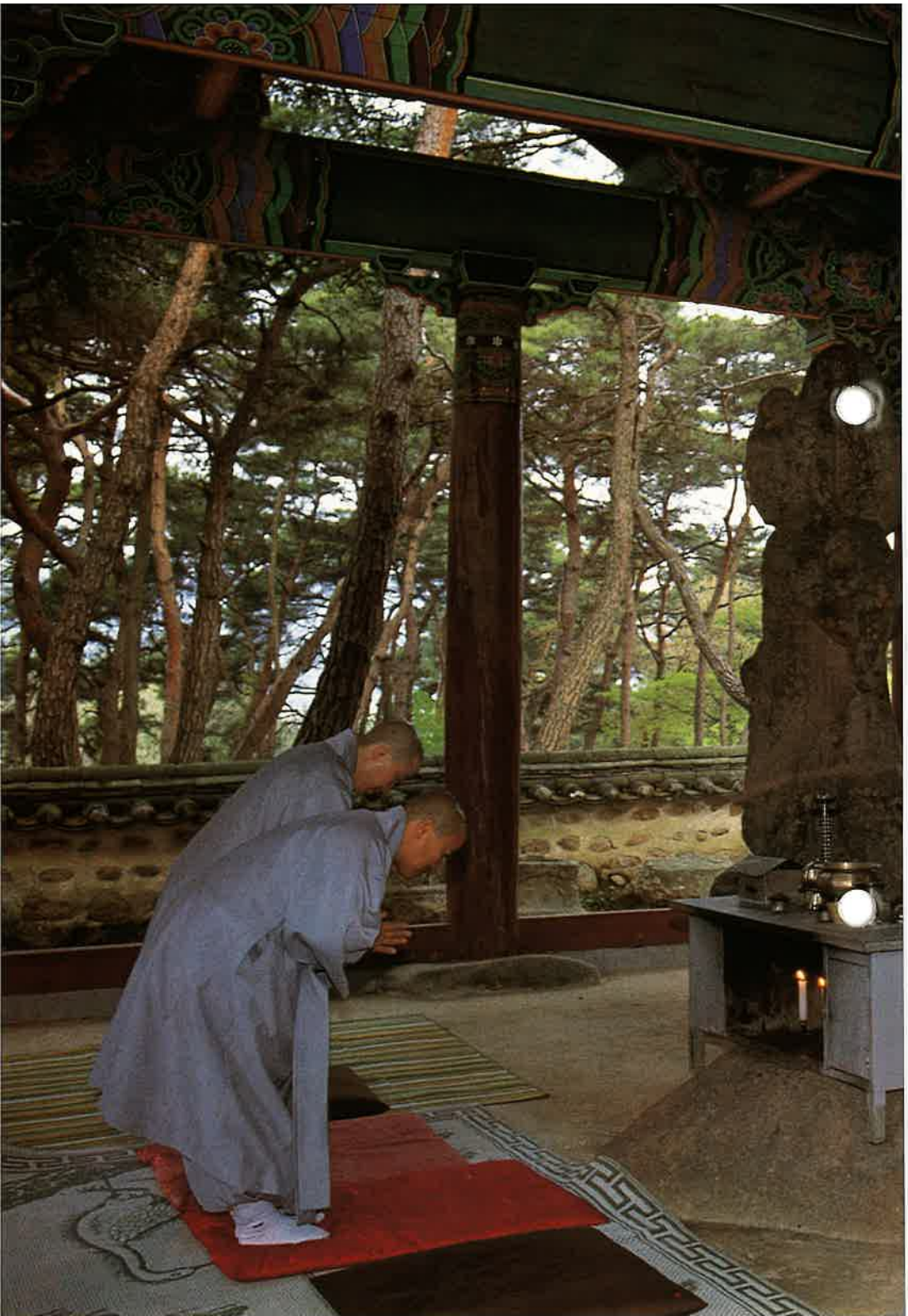
佛国寺　石窟庵　国宝の石造釈迦如来坐像

慶州遠景　石窟庵展望台から

慶州近景　ホテルの窓から

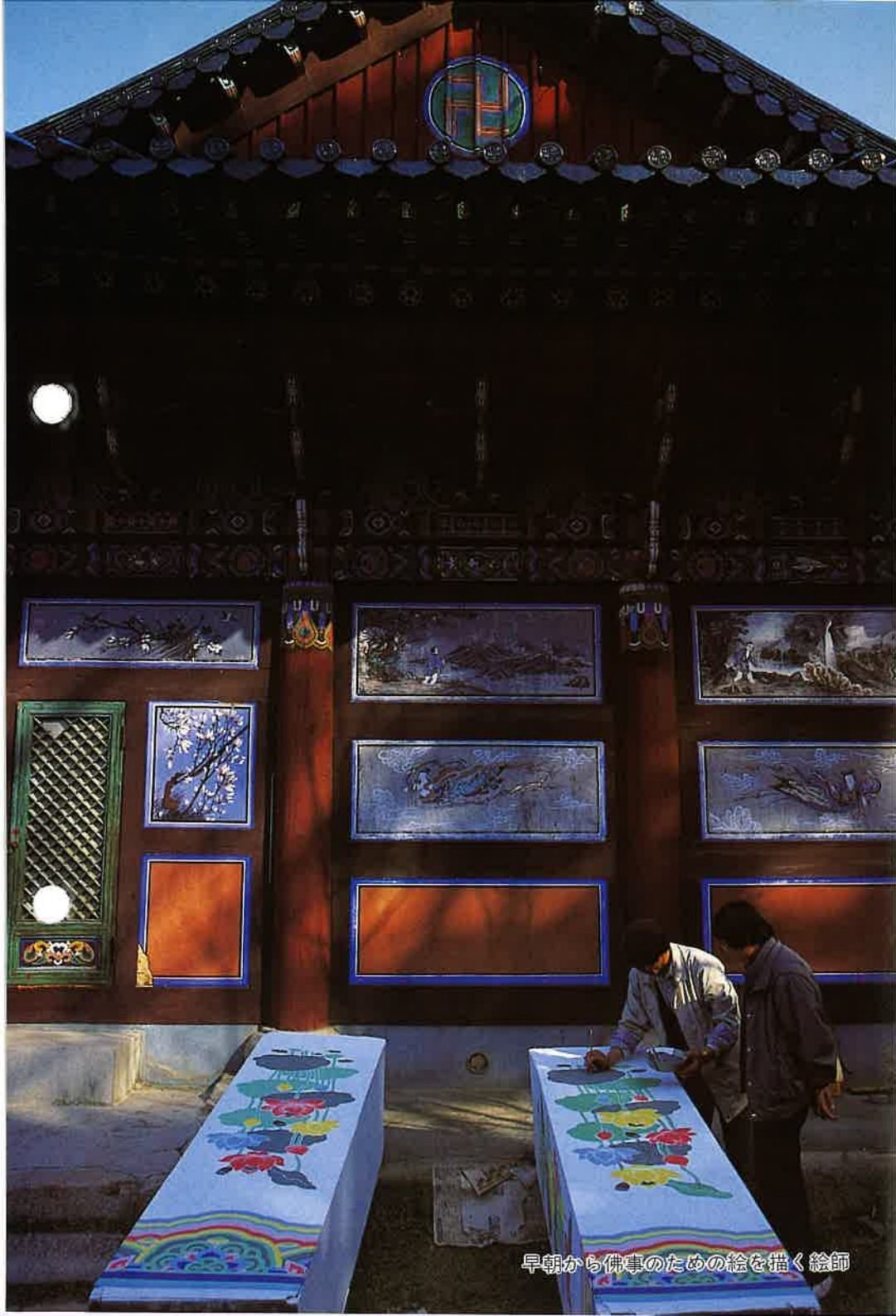


慶州　三体石佛（釈迦三尊）



海印寺　斎時(昼食)を告げる法鼓

慶国寺



早朝から佛事のための絵を描く絵師

カラー■志は仁なり――韓国を歩く――
巻頭言●かっての親しい友に還ろう……黒田　武志　18
特　集●韓国仏教の現状と今後の展望……鎌田　茂雄　22
●韓国仏教との出会い……佐藤　俊明　35
カラー■韓国ふれあいの旅……59
連　載●くらしの中で読む「正法眼蔵」……小倉　玄照　63
留学記●はじめてのインド国内旅行……島　岩　71
●水の都スリナガル……阿部　慈園　84
●シク教の祈り……保坂　俊司　88
●小さな訪問者たち……清水　晶子　92
●クリシュナ・ムールティ神像のこと……及川　弘美　97
第6回派遣僧入選論文……101
善光寺だより……138
読者からのお便り……143

題字・グラビア・さし絵　伊藤三喜庵
写　真　駒澤　晃
カット　古刷仏集より

かつての親しい友に還ろう

法隆寺の大宝殿にある、あの長身痩軀の美しい姿の百済観音は、その名の示すとおり百済の国から伝えられたものともいわれるが、朝鮮半島は、仏教をはじめとして大陸文化を伝え、わが国古代文化の形成に大きな影響を与えた、いわば先輩格の国だったのである。

ところが、日本列島の脇っ腹に短刀を突きつけたような朝鮮半島という地形からみると、大陸の南下する勢力を阻止する国防上の重要拠点ということになり、文化の交流とは逆に侵攻にそなえた防波堤としなくてはならなくなる。往昔のことはともかくとして、明治六年の征韓論からはじまって、明治四十三年の日韓合併条約の締結はまさに朝鮮半島を犠牲にした日本の国家安全保障政策だった。

こうして、日韓両国は、救い難い不幸な、ゆがめられた間柄となり、一衣帯水の地にありながら、遠い遠い国になってしまった。

最近ようやく両国の国民のしこりも解けはじめた。そして過般の

韓国盧大統領の来日と天皇陛下のお言葉によって、今後は真に親しい隣人、隣国となるであろうことを考えるとまことによろこばしい限りである。

さて、わが善光寺海外留学僧派遣育英会は現在、韓国の方、五人とご縁を結んでいる。すなわち三名は韓国から日本へ、一名は日本から韓国へそれぞれ留学中である。ほかに留学を了えた一名は目下ソウルに在って活躍中であり、過般来日して佐藤老師に就いて在家得度の式を挙げた。

こうしたささやかな日韓仏教交流の歩みの中で、四月中旬、はしなくも訪韓の機会を得た。これはほんとうに有難い、有意義な旅だったし、これを契機に、育英会の活動を通して日韓仏教の相互交流に微力を捧げたい決意を新たにした。それで今回は、韓国仏教を特集した次第であり、ぜひご一読を乞うものである。

近くて遠い他人を近くて親しい友とすべくお互い努力いたしましょう。

新しい仏教宇宙

宇宙は　およそ百五十億年前
ビッグバン(大爆発)によって誕生した

赤間　義徳

一九八四年新春
〝仏教を興隆し
世界の平和に寄与するため
宗派をこえて
海外に留学僧を派遣しよう〟
方丈様の大誓願の
聖なるビッグバンによって
新しい仏教宇宙が誕生した。

ビッグバンの力動(りきどう)は
善光寺・檀徒の仏心を通して
三十人の海外留学僧にうけつがれ
われら志あるものは
一食一口を献じて
大誓願の実現に参加するよろこびを
日日(ひび)　かみしめている。

現在も膨張しつづける
宇宙のように
大誓願の心の輪は　輝きを増しながら
時空をこえて
新しい仏教宇宙を無限にひろげていく。

韓国仏教の現状と今後の展望

愛知学院大学教授
東大名誉教授
鎌田茂雄

韓国の花まつり

韓国の花まつり、つまりお釈迦さまの誕生会は、旧暦の四月八日に全国各地の寺院で盛大に行われ、当日はたくさんの信者で賑わう。しかもその日は国家が正式に制定した祝日なのである。

まず目につくのは、蓮灯（れんとう）と呼ばれる色とりどりの提灯（ちょうちん）で、これが寺院の境内はもとより街頭や各民家にも取り付けられる。寺院境内の蓮灯は信者が奉納したもので、自分の名前や生年月日などをそれに書く。値段によって各種のサイズがあり、金持ちたちは当然大きい蓮灯を奉納する。大きな寺院などは蓮灯が多くて本堂が埋もれて見えないほどである。

当日は朝から僧侶が読経や五体投地の礼拝などの儀式を行う。日本ではお釈迦さまの像に甘茶をかけるが、韓国では水をかける。そして大

奉納された蓮灯

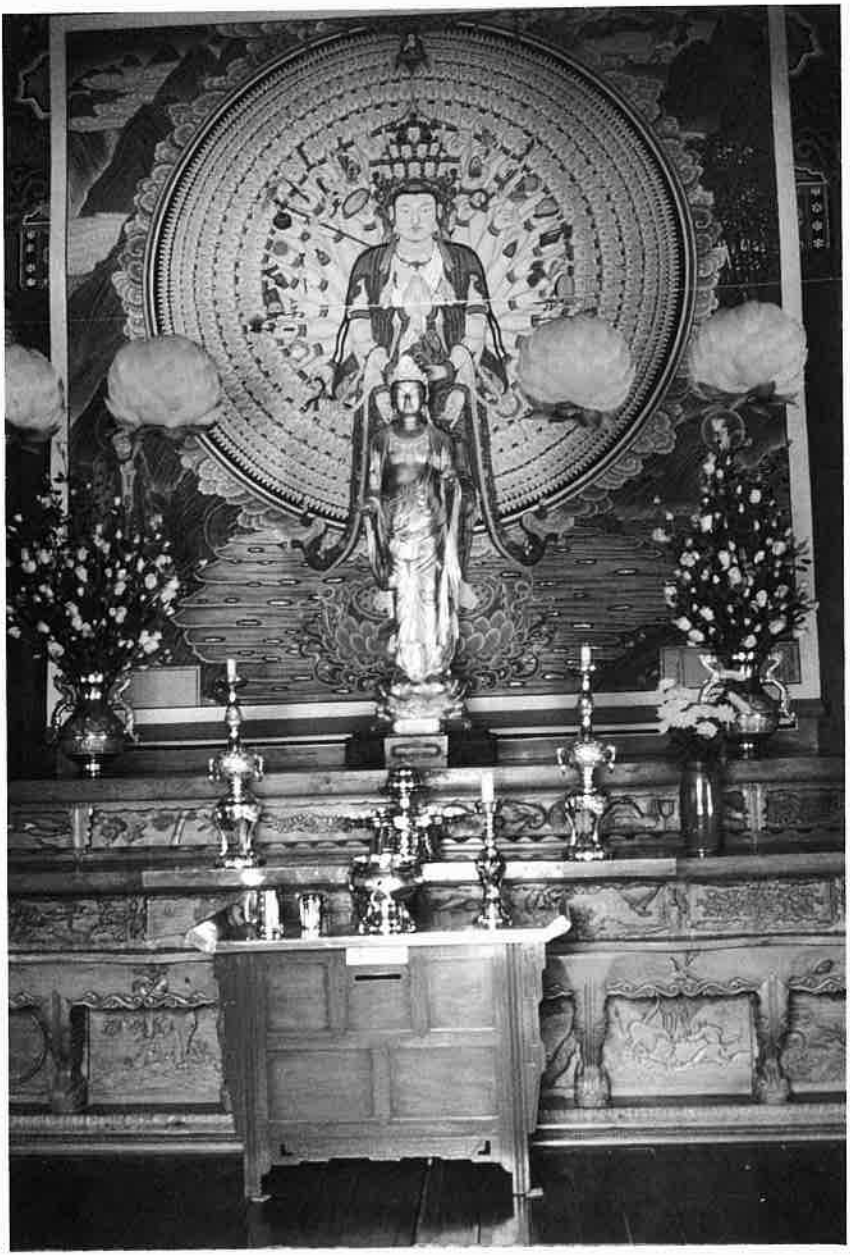
きな寺院などでは、韓国の伝統的な踊りの一つである僧舞が境内で演じられる。これは人間国宝とでもいうべき、この道の専門家が静かに優美に踊るもので、観客が信仰心を起こす程のすばらしい宗教的な舞である。

さらに仏誕会での韓国独自のものとしては掛け仏がある。これは木の柱二本を立てて、その間に仏画を描いた幕を張る。巨刹では実に縦二〇メートル、横一〇メートルもの巨大な掛け仏が立てられ、大勢の信者達が色とりどりの民族衣装で正装してその前に集まり、掛け仏に向かって五体投地の礼拝を百八回繰り返すのである。この掛け仏は日本の仏教ではあまり行われないが、中国のチベット系仏教の寺院では、これと同じような仏像を画いた大きな幕を山の上に張り、信者がこれを礼拝している。

信者たちは山海の珍味をはじめお菓子、果物などを持って朝から続々と寺に集まり、法要に参列したり、僧舞を見たり、寺の用意した精進料理をいただいたりして、お釈迦さまの誕生をお祝いするのである。

そして午後八時頃になると、誕生会のクライマックスともいうべき蓮灯行列が始まる。カラフルな蓮灯を手にした信者や大学生、子供たち、そして僧侶が列をなして寺院をつぎつぎと出発し、約三、四時間かけて市内を一巡する。それは光が満ちあふれたもっとも華やかで美しい一夜である。

慶州の名刹、仏国寺には有名な釈迦塔と多宝塔がある。この美しい仏塔の周囲を回るのが「塔回り」である。まず一人がまわり始めると、あっというまに塔は信者で何重にもとりまかれてしまうという。塔回りをする人はみな、灯のついたローソクを持っている。塔回りはお釈迦さまへの献灯の儀式でもある。闇につつまれた吐含山の麓の仏国寺境内を埋めつくす何千という



掛け仏

一年中参拝者でにぎわう仏国寺

仏さまへの献灯の火のかもしだす風情と、善男善女が唱える念仏の声は、まさしくこの世の仏国土であり、浄土であるといえよう（小坂泰子氏「石仏と祈り」世界日報、平成二年五月十三日号参照）。

韓国の仏教宗派

現在の韓国の宗教人口は圧倒的にキリスト教が多い。都市でも田舎へ行っても、どんなところにも十字架を立てたキリスト教の教会がたっている。山深い由緒ある仏教寺院の近くにも必ずといってよいほど、キリスト教の教会がある。キリスト教は六・二五動乱（朝鮮戦争）後、アメリカ軍の進駐とともに急速に勢力をのばしたものである。

もともと韓国には、昔し檀君神話にみられるような一神教を奉ずる精神的風土がそなわっており、絶対的な神格を信仰する傾向があった。

このような素地を背景として、キリスト教が農民運動や労働運動をはじめとし、社会事業や、貧民救済事業などの社会活動に積極的に参加し、さらに政治的には民主化の問題や、南北統一問題についても、キリスト教の神父や牧師が積極的な発言と行動力を発揮してきた。

これに対して仏教は歴史的には朝鮮朝の時代に大きな弾圧を受けた。儒教、とくに朱子学をもって国教とした朝鮮朝では、仏教は社会的に進出することははばまれ、寺院は都市から追放されて、深山幽谷の中に閉じこめられてしまった。そのため社会的活動は禁止され、僧の生活もまた堕落せざるを得なかった。寺院はたんに山水遊覧の場にすぎず、信仰の対象ではなくなったのである。

一九四五年、第二次世界大戦が終わり、大韓民国が独立してから、韓国の仏教は日本仏教の宗派の支配と影響を全面的に否定して、新しい出発をした。日本帝国主義のもとに作られた寺刹令と三十一本山末寺法などは全面的に廃止され、中央に朝鮮仏教総務院がおかれて全国の寺院を統轄した。

一九五〇年の六・二五動乱によって歴史的に有名な多くの寺院が戦火のために焼失した。しかし動乱後、仏教徒のあいだに自覚がたかまり、韓国仏教は独立、自立の道を本格的に歩みはじめた。その第一歩は、妻帯僧の追放であった。妻帯派と非妻帯派に分かれた教団は互いに紛糾を続けたが終結し妥協がはかられた。

現代においては曹渓宗をはじめとし、太古宗などの大きな宗団を中心とし、その他、新興宗団として円仏教をはじめとし、真覚宗、元暁宗、韓国仏教法華宗、華厳宗、天台宗、浄土宗など多くの教団が独立し、それぞれ布教活動をしている。

禅の根本道場―松広寺

韓国の全羅南道昇州郡にある松広寺は、三十一大本山の一つである。全羅南道には求礼（クレ）の華厳寺、海南（ヘナム）の大興寺、順天（スンチョン）の仙岩寺、長城（ジャンソン）の白羊寺などの大刹が多いが、何といっても松広寺は風光明媚にして、寺塔も多く、巨刹の名にふさわしい。松広寺は泉石幽邃な、俗塵を絶ったところにある寺で、その堂塔伽藍も長い間の風磨雨蝕をへて、仏国寺のようなはなやかな色彩はないが、かえって紛華を一洗した森厳の気がある寺である。寺域をかこむ山林には老樹が密生し、その間に堂宇が点在し、清流が渓谷を洗っている。この渓流は曹渓山の西麓を東から西へ流れて蟾津江（ソムジンガン）に合流する。その渓谷は深く、透明な水とともに至るところに絶景をつくっている。

松広寺の門前から山道へ入ると、まもなく渓流の上に虹橋（にじばし）がかかっているのに出あう。この虹橋の上には清涼閣がある。これは今から二百五十年ぐらい前にできたものだが、煩悩をとり除いて仏法の清涼水を飲む入口であるから清涼閣という。虹橋の上に羽化閣（うかかく）があるが、この下を流れる渓流の水量は豊かで、清冽な水が奔流している。

松広寺は禅の根本道場という意味においては、日本の曹洞宗の大本山永平寺や、京都五山や鎌倉五山などに匹敵する。とくに永平寺の参禅道場としての風格に、もっとも類似しているのが、この曹渓山松広寺であるといってよい。

現代においても、米国やヨーロッパの外国人をもまじえて、多くの韓国の僧たちが修行している。外国人も韓国の僧と同じように僧衣を着用し、袈裟（けさ）をつけて坐禅をしているのであり、この姿には真摯な求道者の面影が宿っている。

三宝の寺とは

この修行道場こそ曹渓宗のふるさとであり本山である。現在の曹渓宗には二十四本山が所属している。二十四本山とは、曹渓寺（總務院直轄）、竜珠寺、乾鳳寺、月精寺、法住寺、麻谷寺、修徳寺、直指寺、桐華寺、銀海寺、仏国寺、海印寺、雙渓寺、梵魚寺、通度寺、孤雲寺、金山寺、白羊寺、華厳寺、仙巌寺、松広寺、大興寺、観音寺、禅雲寺である。私もかつてソール市鐘路区にある曹渓寺には何度も訪問し、法要や儀式を見せて頂いたことがある。今から二十年ぐらい前、秘苑の前の雲堂（ウンダン）旅館（現在はない）に宿泊し、朝三時に起きて曹渓寺の朝課に参加したことがある。雲堂旅館というのは純韓国式の旅館であり、私は必ずここを宿とした。従業員が誠実で、親切であること、料理がおいしいこと、名園秘苑の近くにあるので散歩によいこと、料金が安いことなどで、私が韓国の食事や人物に接した始めての旅館であった。慶州とか智異山とか遠方に調査に行くときも、必ずこの雲堂旅館に宿泊して荷物をあずけ、地方へ出張したものである。それは韓国の寺刹を訪ねるためであった。

韓国には三大寺刹というものがある。三大寺刹とは三宝の寺のことである。仏教で三宝というと仏宝、法宝、僧宝の三つをいうのであるが、その三宝に三つの寺をあてはめたのである。仏宝の寺が通度寺、法宝の寺が海印寺、僧宝の寺が松広寺である。その理由は通度寺には仏舎利が祀ってあるので仏宝の寺といわれる。通度寺には本尊がなく、その主尊は境内の奥にある舎利塔である。お釈迦さまの真骨が祀られているというのである。通度寺を創建したのは新羅の慈蔵法師といわれているが、慈蔵が唐から帰国する六〇〇年前後には、隋の文帝が国中の寺に

舎利を奉送し、舎利塔を立てた。このとき、高句麗、百済、新羅の使者が舎利を頂きたいと、文帝に願いでたら、文帝がそれを許し、舎利を朝鮮古代三国に下賜したということが伝えられており、仏舎利が新羅に来た可能性はあるのである。伝説では通度寺の舎利塔に祀られている仏舎利は、新羅の慈蔵が中国の五台山の文殊菩薩より授けられたものといわれている。

韓国の寺はどこへ行っても自然の風光が美しい。智異山の華厳寺も、俗離山の法住寺も、山は深く、巨岩と森林と清流と巨樹とが見事に形づくった自然の中に、本寺とこれに付随している庵室が、森林の中にひっそりしたたたずまいを見せている。そこには昔の高僧の事跡が名残をとどめ、歴史と自然とが混然と一つにとけあっている。法宝の寺、海印寺も深い山あいに建っている寺である。

海印寺は、慶州南道の陜川郡伽倻面にある寺である。大邸（テグ）からバスで三時間近くかかる深山幽谷にある。山あいをぬって奔流する渓流や、渓谷の美はまた格別である。とくに十月末から十一月の初めにかけての紅葉の季節には全山紅葉し、真紅に燃えたつようである。ことに早朝、東の空がかすかに白みかかってから、朝日の光が寺域を映しだす時、寂として静まりかえっている海印寺の全景がもっともすばらしい。早朝二時半に起床し、洗面をすませ、三時からの朝課に参列するときも幽玄と静寂のたたずまいを見せてくれる。

海印寺は法宝の寺であるといわれる。何故ならば八万大蔵経を収蔵しているからである。大寂光殿の背後の急な階段を上ると、そこに大蔵経を収めた経蔵がある。土塀をめぐらした中に板庫が建っている。南北二棟に分かれた板庫は、共に正面十五間、側面二間の細長い建物が中庭をはさんで建っている。中庭をはさんで東西に

海印寺

向いあって小庫が建つ。板庫の中には高麗大蔵経の版木が収められ、小庫の中には雑版を収めており、観世音菩薩の立像の版木もあった。静かな中庭に立ってみると、建物の配置の均衡がよくとれており、実用本位の経蔵は、装飾的なものをすべて取り去ったすがすがしいものである。

板庫の内部に入ると、膨らみのある柱が立って、そのあいだには、ぎっしりと大蔵経の版木がつまっていた。板庫の内部は八万枚余りの版木を入れているだけあって、広々とした空間をとっていた。

この高麗大蔵経は、高麗の高宗代に刊行されたものである。江華島に収蔵されていた大蔵経は、李朝の太祖七年（一三九八）五月、一たんソウルの支天寺に移され、さらにその年のうちに海印寺に運ばれた。伝説によれば海印寺に移されたのはすべて人力によったということであ

る。大蔵経の経版を一枚ずつ人間の頭の上にのせて、ソウルより慶尚北道の伽倻山海印寺までの長い道程をたどったといわれている。現在、海印寺の経蔵にある高麗大蔵経には、韓国民衆の尊い汗がしみこんでいるのである。

僧宝の寺、松広寺についてはすでに述べた通りであり、仏法僧の三宝の寺を現在、なお維持しているところに韓国仏教の特徴がある。

信仰のあかしこそ未来を開く

以上、韓国の花まつり、坐禅の修行や三宝の寺について述べてきたが、韓国仏教は朝鮮朝時代の仏教弾圧や、日帝時代の統制や弾圧があったが、今なお、たくましいエネルギーを秘めながら長い歴史の伝統を継承しつつ独自な仏教を維持しているのである。

朝鮮朝時代、山に追われた寺院や、大韓民国独立以後、キリスト教の教会にともすれば圧迫された仏教界も、今では社会活動の面でも積極的な活動を展開している。

教育活動についても、大韓仏教曹渓宗は東国大学校をはじめとして、数多くの高等学校や中学校を経営しているし、円仏教では円光大学校をはじめ多くの学校や、孤児院、養老院などを経営している。その他、奨学財団などを運営し、学生に奨学金を支給したりしている。

また仏教史や仏教学の研究書の刊行も目ざましく民族社などを中心として、勝れた研究書が数多く刊行されている。韓国仏教研究のためには、これらの韓国の学者の研究書をどうしても読まなければならない。

金知見博士の主催する大韓伝統仏教研究院は十回に及ぶ国際学会を開催し、国際交流のもとで仏教研究をたえ間なく前進させ、日本の学会にも大きな影響を与えた。

このような学術研究の面のみでなく、一般の

五体投地する信者たち

人々の信仰の力が韓国仏教の将来をささえるものと信じる。韓国の大きな寺院の仏殿の前でしばらくたたずんでみよ。必ず信者の婦人が五体投地の礼拝をして、一心に祈願する姿が見られる。その礼拝は日本ではほとんど見ることができない五体投地の礼拝なのである。この真摯な礼拝の姿こそ、韓国仏教の未来を暗示している。ほんとうの信仰に生きた人々がいる限り、その宗教には未来があると私は信じる。たとえキリスト教の信者のほうが人数は多くてもよい。お釈迦さまの誕生会に集まる信者たちの熱気や、国際学会の公開講演会を聴講する何百人もの信者たちの真摯な姿や、寺院に五体投地する敬虔（けいけん）な信者がいる限り、韓国仏教の将来には前途洋々たるものがあるはずである。

大同石窟
第十四窟
三玄庵

韓国仏教との出会い

善光寺海外留学僧派遣育英会常務理事
龍光寺住職　佐藤俊明

重い腰をあげて

前々から韓国訪問を勧められていたが、韓国仏教を紹介する資料が入手できなかったので〝予備知識がなくてはせっかくの訪韓も〟、とためらっていた。

ところが、善光寺海外派遣留学僧のうち、韓国人が五名にも達したので、早晩出かけなくてはなるまいし、何か資料がないものかと思っていた矢先、第五期生（平成元年度派遣）の韓京洙君（大正大学大学院）が、三泊四日のスケジュールを組んで来て、黒田理事長に訪韓を要請した。

「これでは行かずばなるまい」と、お互いようやく訪韓を決意する結果と相成った次第。

一行は四人。黒田理事長に常任理事の私、それに、仏像撮影で令名の高い写真家の駒澤晃氏と善光寺青年会会長の山口義男氏。

過去の不幸な歴史的出来事によって、韓国は心理的には遠い国となっているが、現実的にはわずか二時間のフライトで行ける。山口氏の即興によると、「機内食、食べ終わったら、もう金浦」で、国内旅行とかわらない一衣帯水の地である。

金浦空港には今回の旅行の仕掛人の韓君と第四期生（昭和六三年度派遣）の洪淳海さん、それに第六期生（今年度派遣）陳永裕尼（駒沢大学大学院）の実兄陳闡提先生（曹渓宗総務院、宗正司書室長）と、永裕さんの友人の尼僧、雪峰さんと法念さん、計五人が出迎えてくれた。

この五人は、四日間の全日程、私たち四人と行動をともにし、万事万端にわたり心のこもった奉仕と世話をしてくれた。二人の留学生を除けばこれまで一面識もなかった言葉の通じない異国の人たちが、これほどまでに尽くしてくれるとは、まことに有難く感謝にたえないことで、育英会ならではの感を深くした。

黒田理事長と私は陳室長先生のクルマに便乗、韓君が通訳。駒澤氏と山口氏は雪峰、法念両尼僧さんのクルマに便乗、洪さんが通訳を受け持つという配車区分で四日間をとおした。

第二、第三日は、ソウル――慶州間、往復八〇〇キロの長旅だった。全線にわたって桜が満開で目をたのしませることができた。耳は、というと、私たちのクルマはむくつけき男性だけだったので歌も出なかったが、雪峰さんのクルマは、五月に東京・大阪でリサイタルを開いた梵早尼の讃仏歌をテープで流したり、各自が自慢のノドを披露したりして、たいへんにぎやかだった様子。

来てよかった

ホテルでチェック・インののち、国立中央博物館に出かけたが、相憎、月曜は休館日だった

国立中央博物館

ので、すぐとなりの景福宮をみてまわった。

国立中央博物館の外観は日本の国会議事堂と似た感じ。それもそのはずで、この建物は旧大日本帝国が、朝鮮総督府として今から六四年前（一九二六年）に建造したものである。それにしても、朝鮮王朝の王宮のまん前に、豪華絢爛たる王宮の景観とは全くそぐわない、いや、王宮を威圧するかのごとき、全く異質な建物をよくも建てたものと、旧帝日本の傲岸不礼な振舞いに憤りを感じた。と同時に、明治以後の日本人が、奈良朝以来祖先の心を培ってきた仏教的教養を失わなかったら、両国の間に気まずい不幸な関係は起こらなかったであろうと悔やまれてならない。

私は五十年近く前、軍隊時代、奉天（いまの瀋陽）におったが、本屋で『奉天三十年』という本を見つけた。これは、スコットランドの医師クリスティーが奉天在住三十年の出来事と個

人的印象を書きしるしたものだが、その中でクリスティーは、日清戦争当時の日本軍は天使のごときものだったと口をきわめて称賛し、それから十年後の日露戦争のときの日本軍の堕落を心から慨嘆し、日露戦争後満州に来た日本人はともに語るに足らなかったと憤激しているのだが、それでも長谷川伸の『日本捕虜志』によると、日露戦争当時の思いやりにみちた捕虜の取扱いの数々の事例や、戦争終結するやまず昨日までの敵ロシア軍将兵の弔魂碑を建て、しかるのち二年有半して味方の忠霊塔を建てるなど、怨親平等のおおらかな奥床しさを示しており、これらは今日の日本では夢想だもできないところである。

識者の言によると、日本人の教養の高さは日露戦争までで、明治維新から遠ざかるにしたがって日本人の教養は低くなり、その精神は脆弱なものとなってきたという。それは、廃仏棄釈と明治五年以来の無宗教教育、そして日露戦争の勝利による思いあがりによるものであろうし、その脆弱な精神、失われた仏教的教養のもとにおこなわれた最初の政策が一九一〇年の日韓合併であった。不幸な未来を招くタネはこうして蒔かれたのである。

韓国の美術をこよなく愛惜した柳宗悦は、当時の朝鮮総督府の文化政策に抗して、韓国に対する同情と悲憤の文章を次々と発表した。景福宮正面にある光化門も、実は破壊されようとしたのだが、それが移転だけで済んだのは柳宗悦の抗議の一文、識者の良識によるものだといわれている。

この一事をもってしても、いかに無遠慮な無謀な政策であったかがうかがえる。

こうした思いを抱いて景福宮をみてまわっていると、僧服の私たちに合掌する幾人かに出会った。怨親平等、そして増上慢のみじんもない

この敬虔な姿に接し、韓国を訪ねてよかったとしみじみ感じた。ともあれ、いまのいままで抱いていたモヤモヤが雲散霧消した思いだった。

雪峰さん

雪峰さんが夕食に招待してくれたので出かけることになった。

「尼さん！」これは誰いうとなしにそう呼ぶようになった雪峰さんの愛称である。

尼さんは、運転歴一年少々というのに、ひしめくクルマの間を巧みにすり抜けたり、陳先生もときに追随できないほどのスピードを出したり、男顔負けの女丈夫である。

女性に齢を問うのは礼を失することなので聞かなかったが、だいたい四十代の中ごろだろうということだ。これは、写真家として、女性も一個の被写体としてその実像を捉える駒澤氏と、アクセサリーのお店を経営して、アクセサリーによって変貌する女性の虚像を毎日のように観察している山口氏、このおふたりの鑑定だから間違いないところであろう。なぜそんなに齢にこだわるのかというと、尼さんは八年前に新寺を建立したというからである。すると、三十七、八歳で新寺建立ということになり、現在、弟子が十五人いるというのだから、この若さでこれは並大抵のことではない。

新寺建立からはじまって今日の善光寺を築きあげた黒田理事長であれば、その労苦は人一倍よく知っているだけに尼さんの偉業には感服ひとしおの様子。

「えらいもんだなア」というと、韓君は、「この国では、尼僧さんが寺を建てようと思えば建てられるんです」と、こともなげにいう。

これはやっかみでも嫌味でもなく、事実そのように見受けられるところに韓国仏教の根強さがあるように思う。

日本の僧侶は下化衆生に力点を置いているが、出家仏教の韓国では当然のことながら上求菩提の修行に励んでいる。そのひたむきな修行一途の姿が信者に大きな感化を与え、帰依の心を培養し、〝念ずれば花開く〟で寺も建つようになるのであろうか。

今日、九旬安居は、日本では修行道場の僧堂でしかおこなわれなくなり、また、第一座として修行僧の先頭に立つべき首座は、今や資格を取るための通過儀礼の一つに過ぎないセレモニーをおこなうだけになっている。しかし韓国では、明治以前の日本でもそうであったように、多くの寺々で九旬安居が如法におこなわれ、首座は文字通り大衆の第一座たるべき力量を身につけたものがこれにあてられているという。三省させられる点である。

こうして韓君から韓国仏教についての話を聞いていると、クルマは高級住宅の建ち並ぶ坂をのぼっている。すると間もなく、ソウルの市街が一望できる丘に出る。その丘の一角に斜面を切り開いて建てられたのが尼さんの寺「祇園精舎」である。

本堂に招じ入れられると、等身大の降魔像が私たちを迎えてくれた。降魔の名にしては優しいご面相のお釈迦様で、いかにも尼僧さんの寺の本尊様らしい。

向かって右の壁には縦三メートル、横四メートルもある『般若心経』のレリーフが掲げてあり、「仏誕二五二三年壬戌仲秋」とある。仏誕は説により一定してないが、「壬戌」は昭和五七年なので、今から八年前ということがわかる。

本堂より一段下の庫裡に入ると、オンドルのほのかな暖気が冷えた体をやさしくいたわってくれる。

さすがは女性の館である。花祭の季節でもあって、天井には直径二〇センチぐらいの、まん

韓国の精進料理（祇園精舎にて）

まるい蓮灯がずらりとならび、幼稚園の遊戯室に入ったような感じ。その感じを助長させるかのように、壁面に大きな出席表が掲げられてある。「幼稚園を経営してるのか？」と思って訊ねると、それは尼さんの法話への信者の出欠一覧表だった。

お弟子さんたちが次々にあらわれて歓迎のお拝をしてくれる。そして、棗（なつめ）と二種の薬草を煎したものという甘い湯が出て、次にお茶が出る。これは日本の寺の、梅湯、茶の展待と同じ趣向である。

食事は精進料理で、よくもこれだけの材料を集めたものとおどろくばかり、二十枚近い皿に別々の料理が盛られており、好きなものを自由に取って食べる食事作法で、韓国の精進料理を美味しく満喫することができた。

デザートは隣室に準備してあり、その席に移ると、年少の五人の弟子、いずれも有髪の中小

学生に幼稚園生が姿をあらわし、横一列に並んで歓迎のお拝をする。みな孤児とのこと。お拝がすむと、われさきにと尼さんの両脇に寄り添う。両手をのばしてかかえ込む尼さんの顔はまさにやさしいおかあちゃんの顔だった。

李先生と蔡先生

第二日目の朝、韓君の恩師である李智冠先生を慶国寺に表敬訪問。

慶国寺は、観光案内には載っていない。それだけに閑寂なたたずまいの、七五〇年前に創建された名刹である。さきの李承晩大統領は激務の間、政庁を抜け出し、独りこの寺に来て、三昧堂で瞑想に耽ったということなので、そうしたエピソードのある有名な寺と知っている人は足を運び入れるであろうが、名刹としては観光客にわずらわされることの少ないありがたい寺の一つであろう。

李智冠先生は、四十代で有名な海印寺の住持となり、ついで東国大学の総長に推された韓国仏教界切っての碩徳であり、つい一カ月前、任期満了で総長を辞したばかり。今後は慶国寺住持として韓国仏教界の指導にあたられる由。

前仏教大学の学長蔡澤洙先生が同席、通訳の労をとってくださった。蔡先生は東京大学で学位をとられただけに、日本仏教学界に親しい知人の多い方であり、思わず話がはずむ。

蔡先生はお茶をすすめてこういわれた。

「このお茶は、白樺木の樹液で点てたものです。その樹液は四月中旬、一週間ぐらいの間にしか採れないものです。ちょうどいい時においでくださいました。これは不老長寿の茶として昔から珍重されております。皆さまのご健勝を祈念します。さア、どうぞ」

不老長寿のお茶をありがたくいただきながら、李先生に、日韓両国仏教界の親善友好の在

李先生（中央）を囲んで話がはずむ

り方についてたずねてみた。

李先生がいわれるには――日韓両国の仏教界はこれまで親密な関係を結んで来た。とくに駒澤大学と東国大学は姉妹校の間柄であり、また大正大学ともごく親しい関係であり、多くの韓国学生が学ばせてもらっている。

また、黒田先生にはとくに五名の若い僧に奨学金を出してもらい、感謝にたえないし、今後もよろしく願いたい。

いまのところ、韓国から日本に出かけて学ぶ者は多いが、日本の僧が韓国に留学する機会が少ない。もっと韓国に来て、学園生活を送るとともに、韓国での生活を通して韓国の仏教にふれてもらいたい。これは親密交流を深めるうえに大切なことである。

東国大学では、日本学研究所を設け、全般的な研究に取り組んでおり、古代韓国仏教と日本仏教の関係についても新聞に連載したが、望み

たいことは日本の大学でも韓国学の研究所を設け、その場限りの交流ではなく、もっと着実に学問的研究を積みあげたいものであり、そういう施設があったと思う、と。

おおよそこのようなお話を拝聴し、黒田理事長は日韓仏教界の交流親善に留学僧派遣をとおして微力を尽すことを誓い、一同四人は高麗青磁の逸品をおみやげに頂戴し、蔡先生の案内で諸堂を拝観し、すがすがしい気分で両先生と慶国寺に別れを告げた。

仏国寺

二年前のオリンピックが転機をもたらしたのであろう、韓国の急速な経済発展と近代化は目をみはるものがある。その頂点に立つソウルを離れて慶州まで四〇〇キロの旅。高速道路はよく整備され、さほど混んでないので快適なドライブ。海外に出ておどろくのは日本車の多いことだが、ここ韓国だけは全く例外で、ほとんどが国産車である。国威の宣揚にかける国民の意気込みをひしひしと感ずる。

韓国人の勤勉ぶりを目にするにつけ、遊びを美徳化しているかのようなマスコミに毒されている今日の日本の姿を思うとき、早晩追い越されてしまうであろうと不安がつのる。

どこもかしこも桜は満開、ハングル文字さえなければ日本国内を走ってるかとまごうほどである。東北、北海道で見る樹木が多いが、大樹はほとんど見当たらない。帰国して聞いた話によると、朝鮮動乱の際焼き払われたものとのこと。

× × ×

慶州は「壁のない博物館」といわれるほど、実に多くの文化遺跡が処々方々に散在し、新羅百年の歴史を今日に伝えており、「慶州を見ずして韓国を語るなかれ」といわれているが、何し

ろ短い日程、明朝はソウルに向けて出立しなくてはならないので、仏国寺以外はすべて割愛せざるを得なかった。

新羅仏教芸術の精華と謳われる仏国寺は、慶州の中心部から南東へ一五キロ、吐含山の中腹にある。いわば日本の日光にも比すべき慶州随一の名所で、毎日雑踏をきわめる観光寺院である。

駐車場は満車だったので左に大きく迂回し、書画の展示場前の石段の右傍に二台のクルマを置くに足る空地を見つけ、下車して筋肉のこりをほぐしていると、韓君が、日本人の団体がお詣りに来ている、という情報を耳にして注進してくれた。

黒田理事長は、「もしかしたら洞外君かも知れない。たしか今日あたり慶州とかいっていた」と呟いていた。すると、石段の上から、私たちを見おろしていた人が歩み寄り、「善光寺さんじゃ、ありませんか。洞外さん来ていますよ」という。神奈川B・S・(旅行社)の真川さんだった。

三浦市三崎の本瑞寺住職洞外文隆師は黒田理事長と駒大同級で、宗議会議員として宗政に参画しているが、檀徒三十数名を引き連れての古寺拝観の旅の途中だった。

「ここでお前と会おうとは思ってなかった」互いに偶然の出会いをよろこび合っていたが、まさに奇遇というべきか。クルマの置き場所が違ってたらもう会えなかった。

韓君が前もって連絡とってくれていたが、折悪しく、崔月山住職は他出不在で、代わって梁紫城師が案内に当たってくれた。

この寺は五三五年の創建になり、その約二〇〇年後に増修復され、全国一のスケールと精巧さを誇る巨刹に生まれかわったという。当時の仏国寺は現在の十倍の規模といわれるが、一五

九二年、秀吉の朝鮮出兵の乱で木造建築はほとんど焼かれてしまい、現在の建物はその後数回にわたる大工事により復元されたものといわれる。

何を見ても素晴らしいものばかりだが、石の国韓国ならではの数多い石塔のうち、とくに有名なのがこの仏国寺大雄殿前にならんで向かい合う多宝塔と釈迦塔である。

× × ×

この二つの塔の建立は八世紀半ばといわれ、多宝塔の高さは一〇・四メートル、釈迦塔は八・二メートル。両塔がならんで建つのはご存じ『法華経』に由来するものであるが、その建立にまつわる哀切な物語りを聞いて私はふと『観音経』の長行（散文）の最後の部分に出てくる「瓔珞供養」の一段を想い出したのである。

× × ×

この二つの塔は、百済の石工、阿斯達の作品といわれる。阿斯達は百済の家を出て慶州に来て、長い歳月をかけて多宝塔を完成した。それは、一般の常識を破った奇抜な意匠で、空前絶後の名塔として高く評価されている。続いて、簡潔ではあるが優雅な釈迦塔を造りはじめた。

一方、故郷で夫の帰りを一日千秋の思いで待っていた彼の妻は、夫恋しさのあまり、矢も盾もたまらず、夫をたずねてはるばる慶州にやって来た。

たずねて来た美貌の婦人が石工阿斯達の妻だということを聞いた仏国寺の住職は、

「いま、あなたのご主人は全精魂を打ち込んで塔を造っております。あと数日もすれば、永遠にこの世で輝く塔ができあがります。しかし、いまあなたが現れると、その精魂があなたにふり向けられて塔の完成に支障があってはと心配でなりません。せっかく遠くからこられたのに申し訳ないが、塔の完成まで、どこか静かなと

ころでお待ち願えませんか」
と頼んだ。彼女は、住職の話を聞き入れ、塔が完成するときまで、影池のほとりで待つことにした。
その塔が完成すれば塔の影が池に映るという話を聞いた彼女は、毎日やるせない心を慰めるため、影池のほとりにすわり、うつろに水面をみつめていた。
数日が過ぎたが、影池にはなかなかその影があらわれなかった。そうしたある日の夜だった、皓々と明るい月が東の空から顔を出した瞬間、水中に白い塔が映った。それは釈迦塔ではなくて、実は多宝塔だったのだが、彼女は感激のあまり、「ああ、阿斯達さま！」と、夫の名を呼びながら水中に飛び込んだ。
まさにこのとき、釈迦塔が完成したのだった。阿斯達は、故郷から訪ねて来た妻が、影池で待っているということをはじめて聞き、あたふたと駆けつけたが、ときすでに遅く、妻は水中に言葉もなく横たわっていた。阿斯達は狂ったように妻の名を呼びながら水中に飛び込んだ。
「私は塔に夢中になって、お前を忘れていたのだ。私はもう絶対にお前のそばを離れないぞ」
水中に沈みながら阿斯達はそう言ってこと切れた――という物語である。
さて『観音経』の「瓔珞供養」のくだりだが、釈尊が説かれた観音さまの神通無礙なる救世のはたらきに深く感謝した無尽意菩薩は、
「世にも尊きみ仏さま。私は感激と感謝の意をこめて観音さまに瓔珞（ネックレス）をプレゼントしたいと存じます」
と言い、「どうか、これを受け取ってください」と、首からもろもろの宝珠の瓔珞の価、百千両の黄金に値するものをはずして観音さまに差し出した。
ところが観音さまは、せっかくのプレゼント

多宝塔

を受け取らない。

無尽意菩薩は聴衆の代表者（対告衆）である。そこで、

「これは私一個人のみの気持ではありません。お釈迦さまの法を聴いている一同の気持ちです。どうかみんなの意のあるところを受け取ってください」

と述べた。すると釈尊が、

「無尽意菩薩はじめ、みんなの願いを聞き入れて受け取りなさい」

と口添えしてくれた。そこで観音さまは釈尊の仰せにしたがって、珍しき宝の瓔珞を受け取られた。受け取られたが、それを二つに分けて、一つを釈尊に、いま一つを多宝仏塔に献じたのである。

さて、釈尊に一分を献上したのはわかるが、一分を多宝塔に献上したのはどういうわけか。ここで多宝塔について一言すると、

『観音経』はご承知のように『法華経』の第二五章となっているが、『観音経』が『法華経』とかかわりを持つのはこのくだりで、その他の部分は独立した経典であるといわれている。

多宝塔のことは『法華経』第一一章の「見宝塔品」に出ている。釈尊が『法華経』の貴いことを説いているとき、忽然として大地から多宝仏の舎利を安置した宝塔が湧出し、その塔の中から

「善い哉、善い哉、釈迦牟尼世尊、よくこの貴い法華経を大衆のためにお説きくださる。是の如し、是の如し、釈迦牟尼世尊、所説の如きは皆是れ真実なり」という大音声が聞こえる。そして多宝如来は、

「釈迦牟尼世尊、この座に就きたもうべし」

と、ご自分の座席を半分あけられた。そこで釈尊は塔中に入って多宝如来とならんですわられたというのであるが、観音さまが瓔珞を受け取

り、これを釈尊と多宝仏に献ぜられたのは、自分の無礙自在の力はすべて釈尊の教えによるものであるとし、加えて、釈尊の教えの正しさを証明する多宝如来に敬意と感謝の気持ちを表したものである。

「あなたのお父さんは素晴らしい」と、お父さんをほめたたえ、お父さんの真価を証明する人があったら、あなたも、お父さんに差し上げると同じものをその人にも差し上げる気持ちになるであろう。そのことを考えたら観音さまが釈尊に差し上げたものと同じものを多宝仏塔に献上した意味が理解できるであろう。

そこで釈尊は、

「無尽意よ、観世音菩薩は、是の如き自在神力有りて、婆婆世界に遊ぶ」

と述べられて、長行すなわち散文で書かれた部分が終わるのである。

このように『観音経』の「瓔珞供養」の一段を頭に浮かべていると、阿斯達とその妻は、観音さまが釈迦塔と多宝塔にささげられた衆の宝珠の瓔珞ではなかったかと思うようになり、それならば観音さまがおられるはずだ、観音さまはどこにおられるだろうとみてまわると、一番高い奥まったところ、この二つの塔を見おろす場所に観音殿があって、千手千眼観世音菩薩がまつられてあった。私は私の空想が無意味なものでないことを知ってホッとした。

× × ×

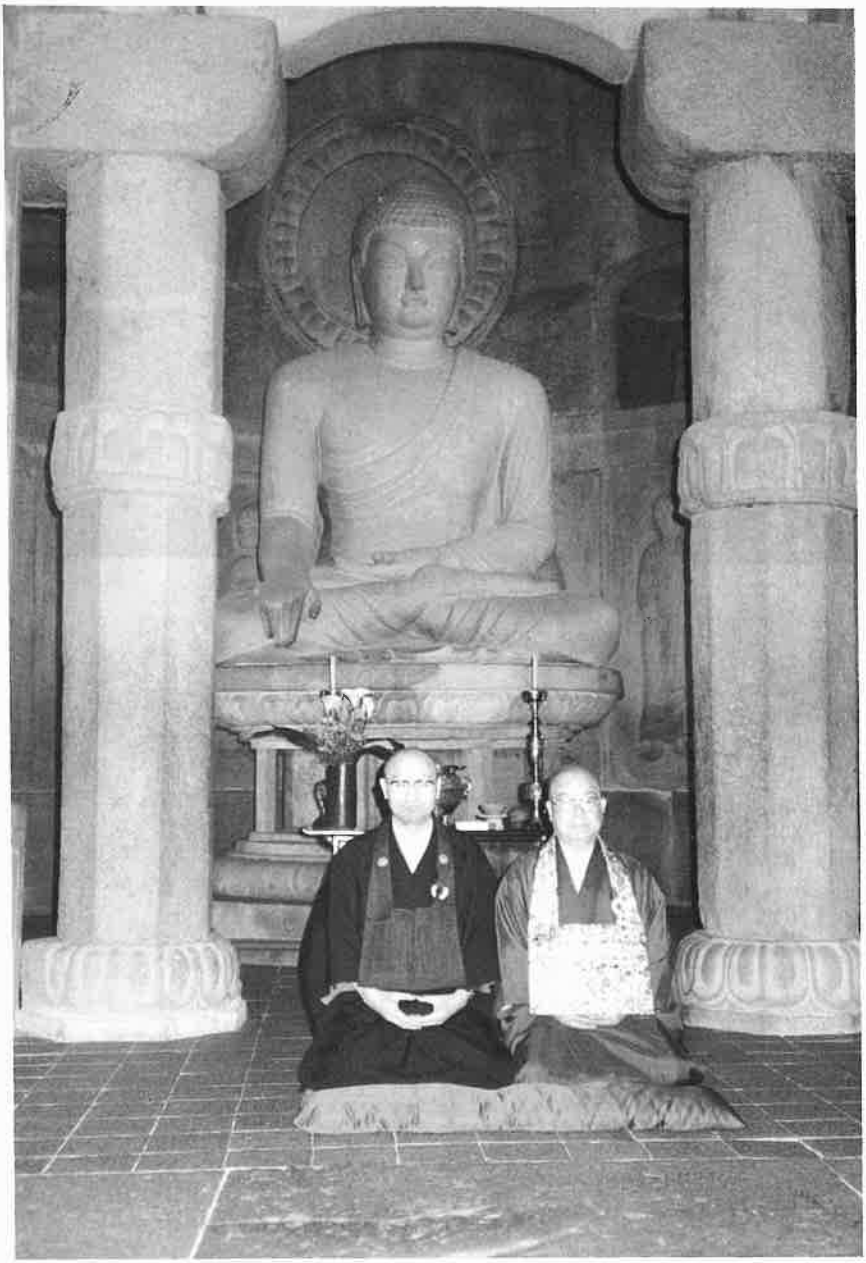
仏国寺を拝観して感服し、反省させられた点、その一つは、僧堂が七堂伽藍から相当の距離にあって、〝観光〟から全く隔離され、森閑としていたことであり、これは日本の観光寺院は学ぶべきことである。いま一つは、施主のない老僧、寺のない老僧を収容する「定慧寮」と名付ける養老施設があったことである。現在七十歳以上の老僧五人が収容されていたが、果たして日本

仏国寺僧堂

に僧侶だけを収容する養老施設があるだろうか。

× × ×

仏国寺でいま一つ有名なのは、吐含山中にある石窟庵の釈迦如来坐像である。私どもが石窟庵に出かける頃はもう日暮れ時だった。さいわい仏国寺のはからいでクルマを通してくれ、参拝客のほとんどが下山したあとだったので、ありがたいことに内部に入って拝観することができた。庵内は、前室、扉道、窟室と分かれ、前室には八部衆像と金剛力士像が、扉道には四天王像が両壁面に彫刻されている。その奥は、花崗岩をドーム型に積みあげた窟室になっており、中央には高さ三・四メートル、幅二・六メートルの白色花崗岩で造られた釈迦如来坐像がある。微笑の中に威厳と慈悲を併せたたえるもので、東洋第一の傑作として尊ばれている。



石窟庵・釈迦如来坐像

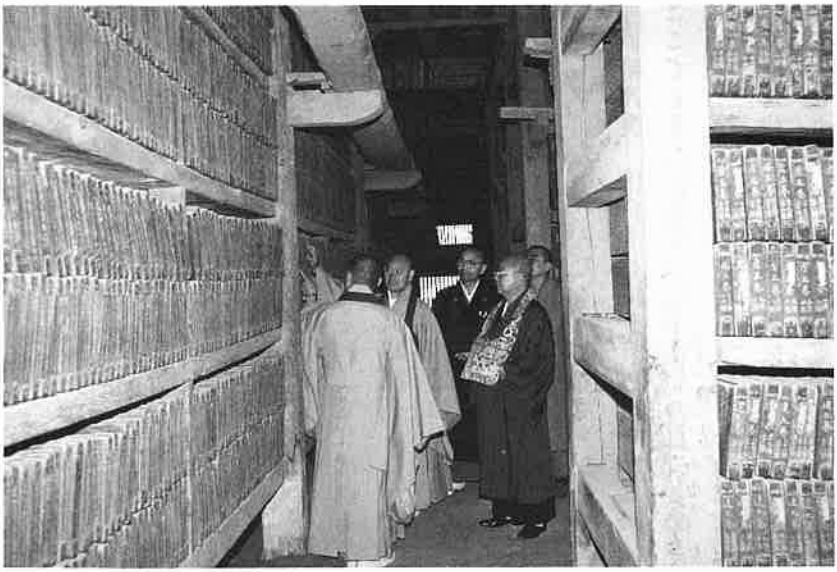
海印寺

第三日。前夜出発時刻でもめた。というのは、韓君はソウルに着いてからの日程をこなすため、七時に出発してほしいという。すると駒澤氏は、せっかく慶州に来たのに写真が足りない。これでは『成寿』のグラビアが組めないから、一時間遅らせてほしい。それまでに撮れるだけ撮るから、ということで八時出発となった。

起床後、道中安全祈願の読経ののち、窓から街を俯瞰すると、駒澤氏が重いカメラ・ケースを担いで足早に移動している姿が見えた。朝食もとらず、たいへんなものだなァと感心した。

八時出発、海印寺に向かう。一一時に到着。ここでもまた住職が他出不在だった。この寺は韓君が在籍の寺なので韓君と親しい教務部長の無観師が代わって懇切丁寧に案内してくれた。この寺は九世紀初頭の開創といわれ、通度寺が仏宝の寺、松広寺が僧宝の寺といわれるのに対して、ここは法宝の寺である。八万大蔵経という法宝を有するからである。すなわち、一二三六年から一二五一年まで、足かけ一六年かけて彫刻された八一、二五八枚の大蔵経版木がここにある。七〇〇余年を経過した今日なお、保存状態がきわめて良好なのは、彫刻、ならびにその保存にいかに細心の注意が払われていたかを物語っている。版木は、ゆがまないように四隅ごとに銅の板があてがわれており、虫のつくのを防ぐために漆が塗られている。法宝殿は南側と北側に二棟が建ちならんでおり、上から吹きおろす北風と、下から吹き上げる南風の通りを巧みに活用する工夫がこらされ、また地下には木炭が敷きつめられ、温度と湿度が保存にふさわしい状態に保たれているという。

この八万大蔵経は、高麗の高宗が、蒙古軍の侵入から逃れて江華島（金浦の西）に都を移し



八万大蔵経

た際、高宗が怨敵退散の祈願をこめて作らせたのもで、のちに江華島からこの寺に移されたものとのこと。この寺は数度にわたって戦火に遭っているが、経蔵と版木だけは無傷のまま残っている。仏天の加護というべきであろう。

なお、海印寺は制中（九旬安居）には男僧五〇〇人、尼僧二五〇人が参集、一如に弁道にはげむという。

海印寺の拝観を終わって、海印寺が現在地に移る前にあった場所に建っている願堂庵に拝登した。ここには「菩薩様」と称される有髪の老婦人が一五名、起居をともに修行しており（制中には三〇名にも達するという）、その菩薩様がたの手料理の昼食を頂戴した。雪峰さんの祇園精舎での場合と同じように、実に多種多様の珍味を満喫させてもらった。これら菩薩様がたは家庭でのつとめを終えた人たちとのことで、私の寺の近くにみる、ゲート・ボールに明け暮れ

てる老婦人とは大きな違いである。
私たちのクルマが見えなくなるまで、合掌して門送してくれたこれら菩薩様がたの姿はまことにすがすがしいものだった。

× × ×

願堂庵を出たのが午後二時、一路ソウルに向かう。旅も三日目で、いささか強行軍だったのでつかれが出て、車中よく眠った。それにしても往復八〇〇キロの運転、陳先生はたいへんだったろうし、また、韓君は万事に気を配り、これまたつかれたことであろう。感謝にたえない。一方、尼さんのクルマはどうなのだろう。時に追い越し、追い越されたりしたが、その際垣間見る車中の様子はなかなかたのしそう。
七時ソウルに着く。ここで尼僧さんがたの仏教生花展に案内された。花祭を記念しての催しだったが、一流のホテル、リベラの三階百済ホールを借り切っての豪勢なもので、尼僧団の底力を見せつけられたような感じで敬服する。
八時からシェラトン・ホテルの大型レストラン・シアターで耳目をたのしませながら夕食をとる。

おわりに

願堂庵の住職、慧庵老師は海印寺の副住職であり、歯の治療のためソウルに出ておられた。それで第四日の朝七時、安下所の津寛寺（真観尼のお寺）に老師を表敬訪問し、朝食をともにした。
先年、来日されて永平寺拝登の際、黒田理事長から便宜をはかってもらったことに感謝され、時間の経過も忘れて歓談した。

× × ×

以上、三泊四日の短い旅であったが、陳先生、雪峰、法念の二人の尼僧さん、それに韓君と洪さんの五人には初中後、すべての面にわたって

お世話をいただき、また拝観の寺々では心からの歓迎、歓待をいただき感謝にたえず、衷心より厚く御礼申し上げるとともに、これをご縁に今後一層日韓仏教の親善友好に微力を捧げる決意を新たにした。

洪さんの得度

洪淳海（ホンスンヘ）さんは、昭和六〇年から六三年にかけて、東京大学大学院、宗教学科に留学した。専攻は、仏教における倫理思想。最終年度になって善光寺海外留学僧派遣育英会を知り、「中道実践の〝正〟観に関する一考察」と題する論文を提出し、めでたく入選して第四期生となった。

この論文は、仏教において、もっとも正しいと重要視したものを「正」と名付け、その流れについて論及したものであり、思考を行動の基準になる原理、原則としての「正」と、これに伴う実践方途としての「正」とに分けて考察し、それが一連の流れの中で重層されながら進展する過程を追ったもので、表現に多少難解な点はあるものの、まことにユニークな論文である。

このたび訪韓に際し、しばらくぶりで会った彼女にその後の活動の状況をたずねると、在俗の一仏教徒に過ぎないため、宗教活動がなかなか思うに任せない様子だった。そこでいろいろ話し合った結果、心の支えとして在家得度を受けては、という黒田理事長の言葉を受けて、洪さんもその気になり、来日の機会に、ということになった。

その機会は案外早く訪れ、得度式は五月一〇日、午後一時より、善光寺釈迦殿においておこなわれた。式典には善光寺関係者十数名のほか、彼女の友人二人が参列した。

仏弟子として生まれ変わるにふさわしく洪さんは純白の韓国の伝統的な民族衣裳を身にまとい、敬虔な態度で式典に臨んだ。

式は年長の故をもって私が本師となって進められた。

まず本師が、薫香、洒水して三世十方の諸仏を奉請し、得度の意義を讃える「礼讃文」を読誦し、ついで「よい哉洪淳海、世の無常なることを悟り、俗を棄てて仏弟子となる、まことに不思議の縁を思うべし」と、全員が「発心の偈」を唱える。次に得度者は本師の前に進み、頭上に洒水、そして剃刀を受ける。この間全員が、「人生を流轉すれば、恩愛を断つこと難し、恩愛を捨てて悟りに入る、これ真実の報恩なり」と「剃髪の偈」を唱える。

次に安名の授与。安名は「正圓明淳」これは、入選論文の〝正〟観の「正」をとり、それが縁で善光寺の海外留学僧に選ばれたので、黒田理事長の道号の一字「圓」をいただいて「正圓」とし、次に本師の名前の一字「明」と本人の名前の一字「淳」をとって「明淳」としたものである。正しく圓(まどか)に、そして明るく淳(きよく)生きて欲しいという願いをこめたものである。

安名授与に続いて、「大いなる哉悟りの服、無相の福田衣なり、如来の教えを身にまとい、ともにもろもろの衆生を渡さん」と「搭袈裟の偈」が唱えられる中、安陀会(あんだえ)(絡子)が授与された。

次に十六条の菩薩戒、そして血脈が授けられ、ついで「回向文」「処世界梵」が唱えられ、最後に本師の口宣があって式は厳粛荘厳裡に終了した。

この洪さんの得度が機縁となって、韓国から日本への留学僧がふえ、また日本から韓国への留学僧(善光寺育英会では現在一人)がふえ、日韓仏教の親善友好に稗益することがあればと願って止まない。それだけに正圓明淳尼上座の今後の活躍を期待する次第である。

韓国ふれあいの旅

撮影　駒澤　晃

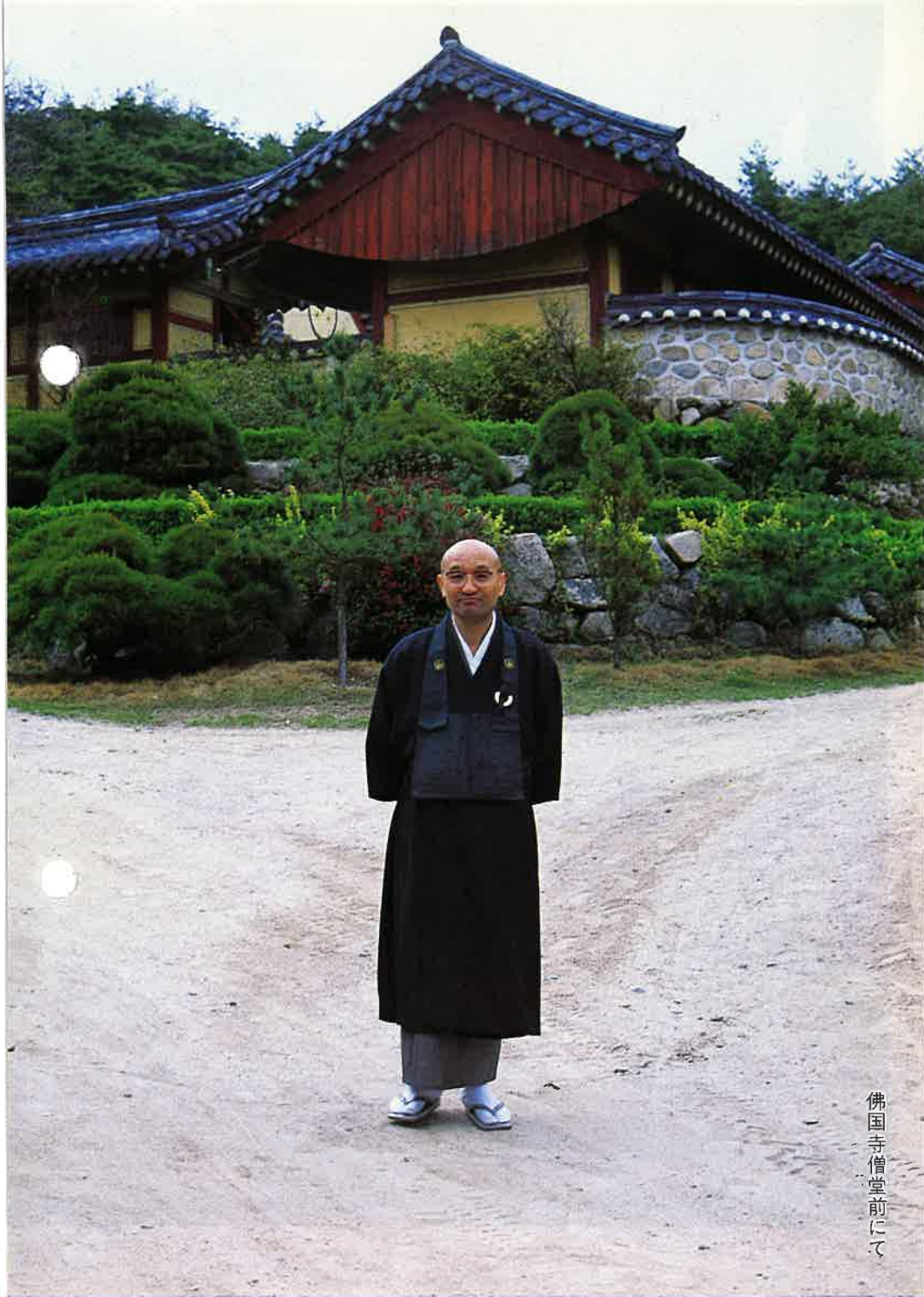
海印寺参道　桜が満開

祇園精舎で

慶国寺　両先生と親しく語り合う

海印寺　鐘をつく僧侶

海印寺〝菩薩さま〟方との別れ



佛国寺僧堂前にて

くらしの中で読む『正法眼蔵』

王索仙陀婆の巻　その四

成興寺住職　小倉玄照

南泉のことば

〈本文〉

南泉一日、鄧隠峰の来るを見て、遂に浄缾を指して曰く、

「浄缾は即ち境なり。缾中に水有り。境を動著することを得ずして、老僧がために水を将ち来れ。」

峰、遂に缾水を将て、南泉の面前に向かって瀉す。泉、即ち休す。

すでにこれ南泉、水を索む。徹底して海枯れ、隠峰、器を奉ず。缾漏れて湫を傾く。しかもかくのごとくなりといへども、境中有水、水中有境を参学すべし。動水也未。動境也未。

〈現代語私訳〉

ある日、南泉は、鄧隠峰がやって来るのに出会った。いろいろ話がはずんだ後、とうとう浄水用の瓶を指さして言った。

「浄水用の瓶は、私の目には見えるが私とは別箇の事物である。瓶の中には水がある。本来私とは別箇の事物である瓶を動かすことなく、老僧のために水を持って来て貰えまいか。」

鄧隠峰は、思案していたがやおら瓶の口を南泉の眼前に向けて水をジャーツとそそいだ。南泉は、何もいうことがなかった。

まったくこれは、「南泉は水欲すれど、海水枯れつくし、鄧隠峰が器を奉れば、瓶の水はあたかも池水のあふれるがごとし」といった案配か。しかもそうでありながら、自分が見ている向こうの世界には水があり、また水の中にもその世界がある、といういうなれば水と瓶との一体のありようを修行によって究めねばならぬ。水を動かすことはできぬか、瓶を動かすことはできぬか。

奇矯な振る舞い

ここに引用されているのは、「南泉浄餅是境」として知られる公案。南泉普願（七四八―八三四）も、鄧隠峰（生歿年不詳）も、共に馬祖道一（七〇九―七八八）の法嗣です。南泉は、『碧巌録』や『従容録』の公案の主人公としてしばしば登場しますが、鄧隠峰はあまり有名な祖師とはいえないかもしれません。

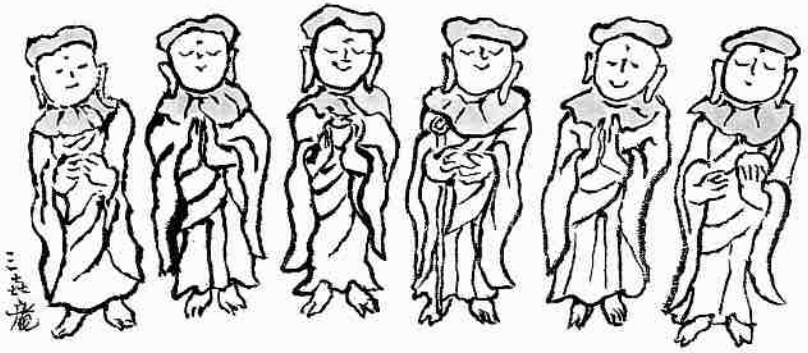
『景徳伝燈録』巻八に、その伝記があります。唐の元和年間（八〇六―八二〇）のこと、鄧隠峰は、五台山に登るため淮西の地を出発しました。途中、反乱を起こした呉元済の軍隊と官軍との交戦の場に遭遇した鄧隠峰は「錫を空中に放ち、身を飛ばして」そこを通過したということです。両軍の将兵たちは、それを見て戦意をすっかり喪失してしまった、と伝は記します。

このような奇蹟を鄧隠峰は次々に表したので

しょう。それが人々を惑わすことを恐れて自ら五台山に入り、金剛窟の前で入滅してしまいました。その最期がまことに壮絶です。今まで誰もやったことのない死に様をしてみせようと意図して、倒立をしたかたちで息を引きとった、というのです。

いわゆる「南泉浄缾是境」のこの話も『景徳伝燈録』巻八によっています。この話は、鄧隠峰が、今述べたような奇跡に近い行為をしばしば演じた祖師であるということを抜きにしては読解が不可能でしょう。

自分にとっては、まったく必要のない瓶はそのままにして、水だけを届ける、ということは、常識的にはまったく不可能なことです。しかしながら、しばしば奇跡を演じると噂されている鄧隠峰ならひょっとして可能なことかもしれぬ——南泉は、そういう伏線の上でものを言っているのです。



もちろん、鄧隠峰は、人々の目を欺くような奇矯な振る舞いを初中（しょっちゅう）していたにしても、神がかった奇跡を手品師のごとく演じていた人物ではありません。瓶の中から、水だけをサーッと空中に立ち上らせ、それを南泉の口に注ぎ込む——そんな奇術的なことがやれるわけはありません。

戦闘中の野を空中に身を飛ばして通過したという話にしても、死をも恐れず平然と戦場を走り抜けるという奇矯な行為に、兵士の方が肝をつぶしたのだ、と考えてごらんなさい。それは、さもありなん、という話になります。

さて、鄧隠峰は、南泉のからかい半分の問いかけに対し、瓶の水のすべてを南泉の眼前にぶちまく、という奇抜な方法で答えました。しかも、それが問に対する答にちゃんとなっているところがまたすばらしいのです。

現実世界も複雑

話はちょっと変わりますが、私は今、町の教育委員をしています。町の中学校の教育水準が低下して、生活指導や進学指導の面で問題続出の状況が数年続いています。

例えば、中学時代に、模擬テストの偏差値で輪切りにされて、実業課程のある高校に進んだA君。保育園時代のことをよく知っている家内は、A君の進学先を聞いて、首をかしげていました。大学進学のコースへどうして行かなかったのか、と不思議だったようです。

はたしてA君は、夏休みにならぬ間に登校拒否を起こし、遂に退学。幸い、両親がしっかりしていた人だったので、A君の悩みをよく理解して、中学浪人として塾に通わせました。そして、翌年の春には、いわゆる名門の普通科高校に合格。三年生の今は、大阪大学を受験するの

だといって頑張っています。

そのA君、ある時、

「ぼくの青春に中学時代はない」

という名セリフを吐いたと聞きました。

私の愚息なども、中学時代は成績もパッとせず、やっとのことで普通科高校に進学したのですが、高校生になってからは、

「勉強って何と楽しいんだろう」

と、毎日鼻歌まじりで勉強するようになり、成績もどんどんよくなって行きました。その彼が、中学卒業以来、大学生になった今も、中学校へは決して足を運ばないし、中学時代のことを家庭の団欒時にも話題にしたがりません。

潜在的には優秀な能力を所持しながら、たまたま中学時代に、先生や親に対する不信感を募らせて勉強を怠り、いわゆる偏差値からすれば三流高校にしか進学出来なかった子の悲劇もたくさんあります。少なくとも小学校時代までは、家庭の農作業も積極的に手伝い、児童会長までこなしたはりきり屋のR君が挫折したのも中学時代。結局、こと志と異なる高校にしか入れず、アルバイトに精を出し、ある日、深夜の国道でオートバイ事故を起こして若い生命を散らしてしまいました。

M君も悲劇の主。中三のとき、担任が面接して進路を問うた時、彼は、大学進学の名門普通科高校か、だめなら誰でも入れる高校でよい、というやけくそ的な答をしたそうです。母親があれこれと浮名を流し、家庭が崩壊してしまっていましたから、彼の生活も荒れていたのです。担任は、模擬テストの偏差値をもとに「普通科は、無理だな」と言ったらしい。彼の生活は、ますます荒れて行きました。難なく入れる高校に進んだ彼は、これも夜ふけて女友達を単車の後に乗っけて交通事故。高校も中退してしまったそうです。

先生方は、自分では一生懸命やっているつもりらしいのですが、高校へのいわゆる進学成績もパッとしないし、反抗的な行動をする荒れた生徒も多いようです。学校側は、この町の親が教育に関心が薄いから結果として生徒が悪いのだ、と言います。親の方は、中学の先生の指導がおかしいのではないか、と寄るとさわると陰口を言っています。

私が輪番で教育委員長をつとめているとき、中学校の校長さんが停年になる時期が来ました。かつて高校に勤務していた頃の同僚などが、今、働きざかりで、県の教育委員会の課長になったりしているものですから、私はそのコネを頼って、いい校長さんを私の町に廻してくれ、と秘かに陳情活動をしました。みんなよしよし、と引き受けてくれ、その年の三月末には、人事担当の偉い人が「自信を持っていい校長をまわしたからね」などと言ってくれました。

では、その後、私の町の中学校がよくなったか、というとどうも一向に変わりばえがしないのです。中には、「前の校長さんの方がまだマシじゃったよ」などと公然という人すらある始末で、こうなると、私がやった運動は、はたして何であったのか、と自己嫌悪に陥ってしまいました。

おまけに、その後も性懲りもなく、生徒や親の情報を集めて、今、ガンになっている先生はこのあたりか、と目星をつけ、人事移動に厳しく注文をつけたりしたものですから、現場の教員組合から反発を食う始末。このごろは私もすっかり匙を投げた感じです。

境中有水、水中有境

私は、何とかよい先生を集めたいと悪戦苦闘したのです。しかし、それは、言ってみれば、瓶を動かさずに水だけを求める、というおよそ

不可能なことに大真面目に取り組んでいたにすぎません。

南泉は、水を索めました。私は、よき校長さんを索めました。鄧隠峰は、南泉の索めた無理難題に対して、ずいぶん荒っぽい答え方をしました。県の教育委員会の偉い人は、私の厚かましい要望に、まことに丁重に応じてくれました。

しかし、水を求めながら結局それを得られなかった南泉とまったく同じ轍を私も踏んだようです。望んだような名校長さんは結局得られなかったのです。

ごく普通に、「隠峰さん、ちょっと水を」と言えば、南泉は水を自分の思いのままに入手したことでしょう。私も、下手な手段を講じることなく、運を天に任せて、いい校長さんが来られればいいがなあ、と念じていた方が結果は、案外よかったかもしれないのです。強引に自分の都合を優先させてみても、結局は、全体のバランスの中でことが運んでいくのです。

かと言って、運命論者のように消極的になっていればよいというのでもなさそうなところがむずかしいのです。「境中有水、水中有境」を学

ばねばならぬのです。つまり、いい校長さんを求めようとすれば、いい宿舎を整えたり、町長さんや教育長さんを中心にして、本当の意味で子供を大切にする教育行政が町で行われていなければならないのです。

それはとてもむずかしいことです。私が一人で力んでみてもどうなるものでもありません。むしろ、力めば力むほど結果はよくないことは、さきほど述べたとおりです。

「水中有境」が大切なのです。自己の利害打算を離れて、本当に子供の立場に立った生活を日常に実践して行けば、自ずとその周辺に子供を大切にする環境が広がって行くのです。もっとも、文明の発達と共に人間の横着本性はとめどもなく肥大して来ました。やがて「修行」というようなことばは、古語辞典にしか残らないのではないか、と思われるほどになっているのが現代です。

大人も子供も自然の摂理に即して、もっともっと横着本性を抑制しなければならないのではないか、という私の教育論が、そう簡単に受け入れられる素地は、現代にはありません。しかし、だからといってあせってもどうにもならないのです。小学校も、中学校も、町の教育行政も、なるようにしかならないのです。

私は、ただ私なりに縁ある人々と一緒に子供と誠実に対応していればいいのです。それが「水中有境」なのです。

「動水也未、動境也未」

そうです。水を動かすことも、状況を動かすことも、私には出来っこないのです。そこのところを悟った上で、しかもなお、教育や保育に黙々と努めるようにせよ——道元禅師は、そんな風におっしゃっているような気がします。

インド留学記

その4

はじめてのインド国内旅行(2)

愛知学院大学
助教授
岩島

ジャイナ教出家僧の生活

ジャンブーヴィジャヤ師は、五十前後の優しそうな、やぎ髭のおじさんだった。ジャイナ教の坊さんは、頭髪や髭をそらず、年に二回だけ髭を抜くとかで(さぞかし痛いだろうな)、やぎ髭をはやしているのだ。どこか子供のようなところのある人で、とても親しみを感じた。「一生独身で出家生活を続け、托鉢で生活していると、世俗の塵にまみれない分、子供っぽさを残すのかな。日本の坊さんみたいに、結婚してしまうと、なかなかこうはいかないだろうな。やはり、坊さんは、出家じゃなくっちゃ」などと思った。これは、のちに、チベットの坊さんに会ったときにも感じたことである。

二晩、信者用の宿泊施設(ダルマシャーラー)に泊めてもらって、ジャイナ教のことをいろいろ教えてもらった。ジャイナ教のことになると、ジャンブーヴィジャヤ師は、歴史、教義、修行、生活等にわたって、本当に熱っぽく語ってくれ

た。

師の一日は、四時起床に始まる。起きるとすぐ、着物に虫などついていないか払ってみる（これは、誤って、着物についた虫を殺したりしないため）。その後、一時間、崇拝と瞑想。八時には、托鉢に出て、朝食。肉・魚・卵はもちろんのこと、じゃがいも等の土の下からとれる野菜も食べない。じゃがいも等も食べないのは、次の二つの理由によるのだそうだ。（一）じゃがいも等は、切って土に埋めておくと、また生えてくる。これは、ジャイナ教の世界観の中では、霊魂が二つ以上ある植物ということになる。一方、地面の上に生えている通常の植物は、切ったらもう生えてくることはない。これは、霊魂が一つしかない植物である。従って、霊魂が二つ以上ある植物を食べるよりは、霊魂が一つしかない植物を食べるほうが、まだ罪が少ない。（二）土の中から取れる植物を掘り出す際、誤って、土の中に住む虫を殺すという罪を犯す可能性がある。このような可能性は、避けるべきである。つまり、不殺生の日常的実践なのである。

十二時頃昼食。昼食後、ジャイナ教理の勉学と訪れる信者へのお説教。夕方には、また、一時間、崇拝と瞑想し、一日の反省を行う。日没後は、水はおろか薬も飲まない。なぜなら、暗闇のなかでものを口にすると、誤って虫等を殺すという罪を犯すことがあるからである。

また、水を飲むときにも、水中の小虫を誤って飲み込んだりしないように、水は濾過して飲む。外出して道を歩くときは、蟻などを踏みつけたりしないように、道を掃きながら歩き、また、空中の虫を吸い込んだりしないように絶えずマスクをかけて歩く。当然、蚊や蠅を殺したりするようなこともない。師は、蚊がよってくると、払子で優雅に払いのけていた。とにかく

このように、不殺生という原則が日常生活のなかに貫徹しているのである。

さらに無所有の原則もまた、徹底している。無所有の原則を徹底させていけば、財産から手回り品は言うに及ばず、文字通りの裸一貫にならざるをえないはずである。ジャンブーヴィジャヤ師は、衣服をまとうことを許容する白衣派なので、一枚だけ衣服をまとっていたが（夏でも冬でも一枚だけ）、衣服をまとうことを認めない派（空衣派）では、本当に一糸まとわぬ姿で生活しているのである。日本で空衣派の話を聞いてはいたが、なんとなく、隠すべきところだけは隠しているのだろうと思っていた。だから、南インドの空衣派の坊さんの写真を見た時には、ちょっとショックだった（なお、空衣派の尼さんはいないのだろうか、などと不謹慎なことは考えないこと）。

このように個々の事象を取り上げると、中には滑稽な気持ちがするものもないではないが、不殺生なら不殺生という思想、無所有なら無所有という思想が、ジャイナ教の出家僧たちのなかで、日常生活のすみずみまで貫徹しているという思想の徹底性、これは日本的風土のなかでは、とても見られないスゴイものだとしみじみ思ったのであった。

ジャンブーヴィジャヤ氏との対話

一日目、二日目と、ジャイナ教一般についての講義を受けた。そして二日目も終わるころ、念願の餓死について尋ねてみた。「ジャイナ教では餓死を認めていると聞いていますが、どんな人が餓死するのですか」と。ジャンブーヴィジャヤ師は答えた。「あれはね、病気や年でどうしようもない人がするんですよ。そう宗教的な意味はないものです」。「ええ、そんな馬鹿な。思想的帰結として自己の存在を否定し自覚的に断

食して餓死するんじゃないの？」。私の幻想は、最初から音をたてて崩れていった。

そこで次に、戦争について尋ねた。ただし、戦争一般について尋ねても建前だけの答えしか返ってこないだろうと思い、インドと直接関わる戦争、すなわち中国とインドの国境紛争、インドとパキスタンの紛争について、どう思うか聞いてみた。すると、師は次のように答えた。

「例えば、家に泥棒が入って来たとしてみよう。そして、泥棒が妻を犯し、子供を傷つけようとしたとする。そのとき、家の主人たる夫のとる道はいかなるものであろうか。妻を守り、子を守るのが夫の務めであろう。その際、妻子を守るために泥棒を傷つけ、殺すことがあっても、それは仕方のないことである。インドの他国との戦いは、これと同じである。中国からインドを守るため、パキスタンからインドを守るための戦いなのだ。国を守るために誤って人をあやめることがあっても、それはいたしかたのないことではないか」。いわゆる、防衛戸締まり論である。

「なんだ、これは。あの日常生活のすみずみまで貫徹していた、不殺生の思想はどこに消えちまったんだ」。私の頭は混乱の極みである。

「（ええい、こうなりゃなんでも聞いちゃうぞ）カースト制度、なかでも特に、指定カースト（不可触民制）についてどう思われますか」。師は、答える。「あれは、政治的な仏教の徒だ（不可触民の多くはインド独立後、平等を求めてヒンドゥー教から仏教に大量改宗した）。指定カーストということで、議会のなかでは自分たちのための保留議席を確保し、また教育面では優先的に奨学金をもらっている。これは、逆差別を生み出すことになっている。職業に応じてカーストが異なっているということは、私は原則的にはいいことだと思う」。ここで、私の頭は完全にプ

ッツンになってしまった。話を打ち切って、寝ることにした。

ジャイナ教の宗教的な思想（例えば不殺生）と現実の政治的・社会的問題への対応（例えば防衛戸締まり論）との大きなギャップ。そしてそれを、ギャップだとも感じないジャンブーヴィジャヤ師の意識構造。これをどう理解したらいいのか。夜、寝床で考えた。

いまだに良く理解できないのだが、とりあえず次のように考えた。「仏教でも同じことだが、ジャイナ教徒は輪廻からの解脱を目的としている。そしてそのためには、出家が不可欠だと考えている。だが解脱という世俗的世界からの超越を望むあまり、我々が通常生きている世俗的な社会生活にたいする理解なり理論が軽視される傾向にある。そのため『神のものは神のもとに、王のものは王のもとに』ではないけれど、社会的・政治的問題に関しては、世俗の論理に盲従するという結果になってしまうのではないだろうか。だが出家は別にして、普通の人々はこの社会的・政治的な世俗的世界で苦しんでいるのだ。出家者には、そこがよく分かっていないのではないか」。このように「坊さんはやっぱり出家でなくっちゃ」という、昨日思ったことはかなり逆の感想を抱くことになってしまったのである。

ともかくこのことを契機として、翌朝目覚めたときには、「ジャイナ教の研究を続けよう」なんて殊勝な気持ちは、跡かたもなく消え去っていたのであった。

ナショナリストと個人主義

メッサナをあとにし、ジャイプールで日本へのおみやげの貴石レモン・トパーズを買い求め、クルクシェートラで学会を見学したのち、デリーに戻る。途中、汽車のなかで五十がらみのお

チベット仏教
アミターバ
八大化身
三さい菩薩

じさんに話しかけられる。なんだかんだ話しているうちに、「お前は、中国が好きか」と尋ねられる。漢文なんかはわりと好きなほうだったので、「まあ、好きなほうです」と答える。するとおじさんは言う。「日本は仏教国ではないか。仏教では不殺生を説いているだろう。なのに、暴力革命を認める共産主義の国が好きだなんておかしいじゃないか」と。(むむ、なんてすごい論理だ)と思いながら、とりあえず反論する。「インドはソ連と友好関係にありますよね。ソ連も暴力革命で成立した国じゃありませんか。不殺生を認めるヒンドゥー教の国インドが、ソ連と仲良くしているのは、変じゃないんですか」と。するとおじさんは、「インドやソ連は社会主義国で、共産主義国の中国とは違うんだ」という論理を展開しはじめる。そしてさらに、「国を守るために、インドが核を保有することは正当なんだ」なんて話にまで、彼の論議は自己展開していく。こうなるとインド人の独演会で、こちらはフンフンと聞いているより仕方がなくなってくる。論理にすぐ空虚さを感じてしまう日本的心性と、空虚な論理にでも見事な言葉の装飾をほどこしてしまうインド的心性の差が、歴然としてくるのだ。とにかくこちらは、論理を延々と展開する根気に欠けている。「ああ、またインド人に負けてしまった」とションボリ。

デリーでは、茂木氏(現在信州大学助教授)と一緒に、ヒッピー宿のドミトリー(相部屋)に泊まる。オーストラリアの女性、日本人の学生、茂木氏に私の四人で一部屋である。オーストラリアの女性は、国では教師だったとかだが、インドでは完全なヒッピーで、時折ハッシッシ(大麻)を吸っている。ハッシッシの煙たなびくなか、彼女とインド人について話をする。

「インド人はナショナリストだが、われわれは、なんと個人主義であることか」。これが、話

の結論であった。ジャンブーヴィジャヤ師の場合も、また、汽車のなかで会ったおじさんの場合でもそうだったが、五、六十代のインド人は、とても国家のことを大事に思っているようだ。国家的利益（例えば防衛戸締りま論や中国・パキスタンへの敵意やインドの核保有擁護等）のほうが、宗教的あるいは個人的な利益や理念(例えば不殺生等）に優先してしまうのである。インドの共産主義でも、階級的利益より国家的利益のほうを優先させ、「原爆保持は国家防衛のために必要なものだ」という見解をもっているのだそうだ。だがわれわれの場合には、「戦争が起きたらどうしますか」というアンケートにたいして、ついつい「他の国に逃げ出します」（もちろんその時には逃げ出せるような状況にはなっていないだろうが）と答えてしまうような、そんな世代なのである。

これは結局、一つには、近代化の進行程度の違いに原因があり、一つには国をとりまく国際環境の違いに原因があるのだろう。当時、独立後三十年。インド的貧困、多言語・多民族国家の統一、教育の普及等の内政問題や、中印、印パ紛争などの外交問題など、様々な問題をかかえながら近代国家建設に励んできた国インドの人々と、すでに国家建設を終え、充分な経済的豊かさを獲得してしまった日本やオーストラリアの人とでは、国家にたいする思い入れが違うのは当然なことなのであろう（ただし後で分かったことだが、これがインド人でも私と同世代の人たちになると、われわれに近くなってくるのではあるが)。日本でも、西欧列強の植民地になりかねない状況のなかで、近代国家の建設に取り組んだ明治期の人々のなかには、きっと今のインド人のような人が多かったのだろうと思う。

でも私はやっぱり、汽車のなかであったおじ

さんの元気さより、デリーのドミトリーで会ったオーストラリアのヒッピーのものうげな優しさのほうが好きだ。

犯す文化と犯される文化

デリーのドミトリー（相部屋）であったオーストラリアの女性をはじめ、私が旅行中にインドで出会ったヒッピーには、新大陸（アメリカ、カナダ、オーストラリア）の子が多かった。本国で一年かせいで、二、三年、物価の安いインド、ネパール、東南アジア等を旅行してまわっているとのことで、インドには本国の物質文明にはない神秘的な精神性を求めてやってきたという人が多かったのだ。

日本でも、高度成長期が終わり、オイル・ショックなどで日本経済の先行き不安などがとりざたされ、「物の時代から心の時代へ」なんてことが言われていた。それにともなってインドのイメージも、高度成長期の「貧しい国インド」から「神秘の国インド」へと移り変わりつつあった時期であった。日本人のなかにも、神秘的な精神性を求めてインドにやってくる若者が数多くいた。その意味では、新大陸の人たちがインドにやって来るのはよく理解できる。でも、たまたまなのかもしれないけれど、どうして私の出会ったヒッピーには新大陸の人が多いのだ

ろう。ふと、こう思った。そして、次のようなとりとめもないことを考えた。

私A・「新大陸の国々は移民でできた国だから、せいぜい二、三百年の歴史しかないよね。でもヨーロッパの国々には、ずっと長い歴史と文化的伝統があるからね。その歴史的・文化的重みの違いがあるせいじゃないかな。その意味では、日本にも、インドや中国ほどではないにしろ、長い歴史的・文化的伝統があるんだから、それは誇りに思っていいんじゃないかな」私B・「でもインドや中国やヨーロッパの文化は、近隣地域をはじめ世界各地に伝わっていったけれど、日本の文化はそうでもないから、そう自慢もできないんじゃないの?」私A・「確かに、中華料理ってすごいよね。世界中どこに行っても中華料理屋があるんだから。日本料理はそうはいかないよね」私B・「このあいだ、中華料理屋にいったんだ。そしたらね、店の真ん中の柱に『華僑の足跡、天下を遍く照らす』なんて書いてあったよ。すごいよね」私B・「日本人も山田長政のころ、東南アジアに日本人街を作ったりとか、明治以降も、アメリカやブラジルに移民した時期があったよね。中国人やインド人を見ていると、移民してもたいてい中国人街とかインド人街とか作って、三世になっても四世になっても中国語やインド語も喋っていて、中華料理やインド食を食べてるってとこあるじゃない。中国人、あるいはインド人としてのアイデンティティーが強固だっていうか。あれはすごいよね」私A・「日本人だったらどうかな」私B・「二世の場合どうか分からないけれど、日系三世や四世がアメリカやブラジルで相変わらず日本語を喋っていて、たくわんでお茶漬けを食ってるって場面は、ちょっと想像しにくいよね」私A・「なにが違うんだろうね?」私B・「ちょっと卑猥な言い方だけどね。文化にさ、他の文

化を犯してしまう男性的な文化と他の文化に犯されてそれを受容する女性的な文化ってのがあるんじゃないのかな」私A・「ということは中国やインドや西欧の文化は犯す文化で、日本とか東南アジアの文化は犯される文化ってわけ？」私B・「そういうことだけど」私A・「日本が犯される文化ね。ちょっとゾットしないね。でも、そんなネーミング（命名）をしたところで、結局、違いは分からないなあ」……。こんな風に独断と偏見にに満ち、飛躍だらけのモノローグ（独り言）が続いていくのであった。

帰途の旅

デリーからの帰りマトゥラー、アグラ、サンチーに立ち寄る。

マトゥラーは、インド仏教美術史のなかでマトゥラー様式とかいうものに分類されている仏像とヒンドゥー教の神クリシュナ信仰の地で有名なところだ。駅でまず、荷物を一時預かりに預ける。リュックで鍵がかからないので、「中身が抜き取られて紛失しても、一切文句は言いません」という一札を入れなければ預かってもらえない。「どうせ下着くらいしかはいっていないのだから」と思い、一札入れる。その一札を取った係員が私の腕時計を見て、「売ってくれないか」と言う。こういうことは旅行中よくあることなので、こちらも「これは叔父さんの贈り物で記念の品だから、残念だけど」と、さも残念そうに答える。そうすれば、それ以上せがまれることはないのだ。

駅からサイクル・リキシャ（人力車ならぬ自転車力車）に乗り、博物館へ向かう。だが月曜日だったか金曜日だったかで、博物館は休館日。マトゥラー仏見学ははやばやとあきらめ、クリシュナ神信仰の地に向かうことにする。

日本の浄土真宗では、南無阿弥陀仏（阿弥陀仏に帰依します）と唱えれば、極楽浄土に生まれて、救われるとされているが、インドにもこれとよく似た信仰がある。クリシュナという神様に帰依すれば、クリシュナとともに永遠に天国で楽しく過ごせるというのだ。このクリシュナという神様が地上の民を救うために地上に降誕なさったのが、このマトゥラーというわけなのである。

クリシュナ降誕の地のまわりには、多くの大寺院が建ちならんでいる。それも真新しいものばかりだ。インドの民の貧しさとこの真新しい大寺院の対比はどうだ。これらの大寺院を建てるのに、一体どれだけのお金がかかったことだろう。もちろん「現実が苦しいからこそ、宗教に救いを求める」ということがあるわけだから、「寺院にかけるお金があったら貧乏人にまわせ」なんてことを言うつもりはさらさらないが、「それにしても、もっとなんとかならないのだろうか」とは思ってしまう。しかし、それ以上のことは残念ながら考えられない。

その後アグラで、タージマハールとかいう、巨大で幾何学的な美しさを備えたイスラームの后の墓を見た後、サンチーに向かう。サンチーは、仏陀の骨を納めた仏舎利で有名なところで、小高い丘の上に仏舎利が三つ建ちならんでいた。また仏舎利の門に彫られた彫刻は、インド美術史上とても価値のあるもので、その研究に一生をかける学者もいるのだそうだけれど、その当時の私には、所詮猫に小判であった。私は、半月にわたる一人旅でいいかげんくたびれてい

た。サンチーにあるスリランカの仏教協会かなんかの建てたお寺の宿舎で安く泊まれ、たらふく飯が食え、仏舎利のある小高い丘の上でのんびりと昼寝をするのが、たまらない幸せだった。しかし、それも長くは続かなかった。手持ちの金がついに十ルピー（三百円）をきってしまったのだ。しょうがなく汽車に乗り、プーナへ向かう。

ところが、「一等車は昼の間は予約なしで乗れるが、夜になると寝台に変わるので、予約がいるのだ」ということをつい忘れていた。夜になったら車掌にコンパートメント（車室）から追い出されかけ、あわや、最寄りの駅で降ろされるところだった。なにしろ残金が十ルピーをきっていたので、これには困った。ところが運よく、というかなんというか、たまたまもぐり込んでいた一等のコンパートメントに、東京オリンピックのときにホッケーの選手で日本に来たことがあるという、ターバンを巻き髭をはやしたシーク教徒のおじさんがいたのである。日本に対してとっても好意的な人で、私が日本人だと分かると、車掌やコンパートメントの他のお客さんと交渉してくれて、ともかくベッドとはいかないまでも、コンパートメントの床に寝ていけることになったのである（この人は途中で降りたので、結局はこの汽車の旅の半分くらいはベッドで寝られたのだが）。こうして、とにもかくにもプーナへと無事戻ってきたのであった。

プーナ発プーナ着の西北インド半月の旅は、こうして終わった。汽車の周遊券三百三ルピー、おみやげの貴石レモン・トパーズ代二百五十ルピーを含むホテル代等の諸費約五百ルピー、合計八百三ルピー（当時二万五千円程度）の旅であった。

インド留学記

その10

水の都 スリナガル(2)

東方学院講師
駒女短大講師
阿部慈園

5

スリナガルおよびその周辺に咲いている花としましては、紫色や白いアヤメ、また水仙がよく目につきました。とくにアヤメは、墓地に群生していて、当地の人びとはこの花を「墓地の花」といっていました。

よく知られていますように、インドのヒンドゥー教徒たちは、遺骸(なきがら)を荼毘(だび)に付(ふ)したあと遺骨を、ときには半焼けの遺体をすべて川に流してしまいますが、回教徒（ムスリム）たちは遺体をかならず墓地に埋葬し、お墓を造ります。スリナガル郊外のとある墓地のまわりに卒塔婆(そとうば)に似たものがたてられていて、心ひかれました。ここ以外の北インドや中・南インドの回教徒の墓にはそういうものがたてられているのをまったく見たことがなかったからです。カシュミール地方はかつて仏教が盛んでしたから、ひょっ

とすると何かしら仏教と関わりがあるのでしょうか。

また、樹木は、白樺や柳、モミジなどが多く、少し高地に行きますと松や杉が目につき、日本のものとまったく共通でほっとする想いがありました。けだし、スリナガルあたりの緯度は、わが国とほぼ同じですから、同じ木や花が目に触れるのは当然のことかもしれません。

6

ここの男たちは、二、三人寄りますと、よもやま話しをしながら、水タバコをまわしのみしています。タバコそのものは細かいきざみで、茶褐色で、手でさわるとベトベトしており、かすかに異臭を鼻に感じます。きざみの上に火ダネをのせます。吸い口を強く吸いますと、ガボガボと水タバコ器の底の水が音をたて、強いけむりがもろに肺に入ってきて、吸いつけないわたしはせきこんでしまいました。かといって、軽く吸ってもタバコのけむりは出てきません。あまりうまいものではありません。水タバコ器の高さは、五〇から六〇センチメートルほどで、外側は鮮やかに彩色されていました。

かれらは、また、ハッシッシをよく吸います。市販のタバコには税金がうんとかかっていて、他の物品に比べても高価ですから、そのかわりの嗜好品として安価なハッシッシを吸うのだといいます。これを吸ってかれらがアラーの神に祈りますと、心がますます澄んできて、神に柔順になるともいいます。

ハウスボートの息子ユスフが、その作り方を教えてくれました。ハッシッシの原料となる草（名前は不詳、ヨモギに似た草）を乾燥させ、これをよく手でもみ、黄色くなったところで、ある種の油を加え、さらにもんで、ボール状にするのだといいます。

ふつうは、茶褐色になったハッシッシのかたまりをこなごなにして、紙巻タバコのきざみに混ぜて、混ぜたものをまたもとの紙巻タバコに戻して吸います。比較的多量のその粉を直接パイプに入れて吸っているヨーロッパ人を見て、驚いたことがありました。これが常習になると、肝臓に障害をきたすということです。ネパールのポカラでは、この粉をケーキに混ぜたり、紅茶に入れてのむという話も聞きました。オランダあたりでは、ふつうのタバコより害が少ないということで政府はハッシッシを許可しているそうですが、わが国では大麻（たいま）やＬＳＤと同様に、そのもちこみを禁止しています。

7

五月上旬のスリナガルの気温は、摂氏十五度前後で、雨の降った日には十三度にも下がり、身体がガタガタふるえたことを覚えています。南のプーナは四十度前後かと思うと、インドはほんとうに広いなあと実感しました。

スリナガルへは翌年（昭和五二年）にも訪ねるチャンスがあり、さらに五年後の同五七年の五月には、あこがれのハネムーンでこの地を踏むことができました。

同月九日、デリーを飛びたって、スリナガル空港に降りたちました。ハウスボートまでの道すがら、車窓から、雪のような綿のようなものが空中に舞いあがり、そしてそれらが道路や湖に舞いおちるさまを家内とともに見ました。何かの木の花の繊維とおぼしきもので、そのメルヘンチックな光景に見入る彼女の目は、まるで酔っているかのようでした。

ムガール庭園を三つ訪ね、近郊のパハルガムでポニーに乗りました。家内の同月十日の日記の一節を紹介して、本稿を了とします。

白樺の木の美しさ。水の豊かさ。緑の美

しさ。アカシヤの花がスリナガルを甘い香りで満たしている。そのアカシヤのすばらしさは、アカシヤといえばスリナガル、スリナガルといえばアカシヤというほどにすばらしいのです。日本で見る真白のと、薄紫色のとがありました。どちらも、その房の大きさ、香りの甘さは、日本を思わせました。

パハルガムというところで、ポニーに乗りました。三時間の契約だということでしたが、三十分も乗らないうちにおしりが痛くなって、川の岸辺に休んでばかりいました。岸辺には、なんと忘れな草が自生していました。たんぽぽも咲いていました。日本で見るほとんどの花を見ることができました。

「ウッド・ストック」というホテル兼レストランでコーヒーを楽しみました。なんとそれを運んできたボーイさんは、ネパールから働きにきている人でした。ネパールからはパスポートなしで働きにこれるとのことでした。慈園さんにいわせると、インドはネパールを属国のように扱っているとのことでした。なんとなくホッとさせるボーイさんの顔の表情なのでした。（つづく）

インド留学記

その7

シク教の祈り(2)

東方研究会
専任研究員
保坂俊司

前回は、主にヒンドゥー教とイスラーム教の神の形態を紹介いたしました。ヒンドゥー教における神の観念は、日本人一般が漠然と抱いている神の観念に近いものがありますので、比較的理解し易いでしょう。しかし、イスラーム教のそれは、余り日本人には馴染みがない為にちょっと理解がしづらいかもしれません。そこで、もうすこし説明をいたしましょう。

ヒンドゥー教の神概念は、日本人が神仏に抱く観念と似ています。それは「現世利益」を与えてくれる存在として神を考えるということです。従って、その祈りも人間の利害が中心になってくるという特徴があります。勿論本当の信仰心から純粋な祈りを神や仏にささげる人も多いですし、またいつもは「現世利益」一辺倒でも、心から祈ることだってあります。もっとも両者は形の上では一緒なので煩わしいのです。しかし、神(仏)と人間との関わりを考えると、あるいは心のありかたを考えるとこの両者は大変大きく違うのです。つまり同じ祈りでも、か

たや神との契約あるいはその履行を神に願う行為であり、かたや神を恐れ、神の前に我を捨て去って身を捧げる事になります。言葉でいえば前者が儀礼的祈りであり、後者は心からの祈りということになります。日本で一般的なのは前者の祈りです。つまり、この「現世利益」の為の祈り、あるいは儀礼です。この種の祈りは何処にその根拠があるのでしょうか。少し考えてみましょう。

「現世利益」とは、何か神にお願いして、神の力で其れを実現してもらおうということです。ということは、神は、人間の言うことを聞

いてくれる神でなければなりません。またそこに御財銭・供物あるいは犠牲が介在しますと神はそれらのもので、その判断を左右されるということになります。つまり、神と人間の関係は限りなく対等に近いということになります。更にいうと、この儀礼や供物等の介在物によって、神は人間とある種の契約を結んでいるともいえるのです。ですから人情として、高額の品物や込み入った儀礼やその他なんでも大げさなことが良いとされ、願いの大きさ、困難さに比例してそれらも大きくなるのです。というわけで、日本でも神様はいかにも大口の寄進者や供養者に余計に恩寵を施すようですが、これがインドの神々となりますとなおさらです。呪文（マントラ）やダラニなどによって、まるで操り人形のようになるとまでいっている者さえあるほどです。つまり、人間に限りなく近い神々ということになります。

つまり、神は人間とほとんど違わないわけです。ということは、人間中心の世界観のなかに神がいるということになります。ここに、ヒンドゥー教や日本の神々のような多神教の神観念の基本的構造があります。

それに対して、イスラーム教つまり唯一の神は、決して人間の存在を特別視しません。その意味でいかなる儀礼も、供物等も必要としないのです。ですから、イスラーム教には原則として聖職者はいません。勿論信仰をまとめるための長はおりますが、それとても人間のなかの序列であって、神から見たら区別なしです。ここが一神教の合理的なところです。

それに対して、多神教のヒンドゥー教や日本のそれはいかがでしょうか。インドにはカースト制度があり、バラモンが世に君臨し、既に何回か紹介したような宗教的社会的差別がありま す。日本でも人間が神として崇められる（天神

さまとか、東郷神社とか）などということがあります。しかし、これはイスラーム教では思いもよらないことなのです。

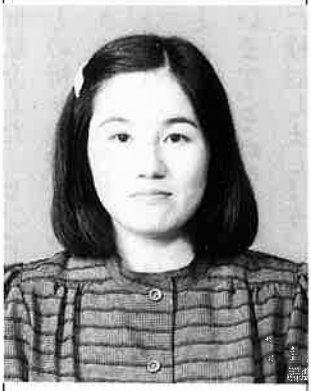
「神はその気になればあっという間にこの世など吹き飛ばしてしまうこともできるお方と、コーランに述べられているように、人間の思いも、願いも全く通じない、人間とは隔絶した存在なのです。ですから、儀礼的祈りによって見返りをもとめようなどという人間側からの働きかけなど全く通じないのです。それは、操り人形が操り手を動かすことができないようなものです。その場合人間は、この絶対的な神とどう関わるかといいますと、ひたすら神の心に縋るしかないのです。それとても神が決めることになるので、どんなに祈ろうが祈ったことで神の心を動かせるなんてことにはならない。

というわけで、ヒンドゥー教の神とイスラーム教の神は全くちがいますし、祈りの位置付け自体もまったく違うということがおわかりいただけたと思います。

前回紹介した、ヒンドゥー教徒とイスラーム教徒との祈りの様子の違いは実にこんなところからきていたのです。

というわけで、これを結びつけることは至難のことということは、わかっていただけることと思います。それをシク教はいかに実現したか、次回に検討しましょう。

小さな訪問者たち



東方研究会専任研究員
清　水　晶　子

四棟から成るデリー大学の女子学生寮(University Hostel for Women)で私に割り当てられた部屋は、一番端の建物、事務所のある最上階（三階）にあった。大学構内には、高い建築物はほとんどなく、見晴らしは抜群だった。屋上に上ると視界はぐっと広がり、豊かな緑の中に建物が見え隠れするのが、はるか遠くまで眺めることができた。

毎日毎日、この雄大な景色に接していると、いつしか気持ちまでゆったりとしてくるようであった。日没頃の一時、朱色の空を背景に大樹と、空が一瞬真黒になるかと思われるほどの鳥たちの各群れが、ねぐらを求めて飛び交うシルエットの美しさは、その鳴き声のにぎやかさと共に、映画の一つの場面のように鮮明に脳裏に焼き付いている。

前庭には、三階のベランダに届きそうな大きなニームの木（インドセンダン）が青々と繁り、鮮やかな青緑色をしたのんびり屋のオウムと元気なシマリスの根城になっていた。都市部のデ

リーでも、人の住む身近な所にこれらの動物を常に見ることができる。

野生のリスは、敏捷で活発な動物である。少しの間もじっとしていない。ニームの木を縦横に駆けめぐる。インドに来てはじめて、リスが鳴き声を出すことを知った。キュッキュッというかん高い声を発する。突然後足で立って、真黒のくりっとした瞳であたりを警戒するようなしぐさは、愛嬌たっぷりだった。

あるキャンティーン（青空喫茶店）のそばにいたリスなどは、人に慣れていて、直接手からスナック菓子をもらっていったりする。

そのニームの木によくやってくるカラスの一団がいた。試しに、毎朝パンのみみをベランダの手すりに置いてみた。しばらくして、好奇心の強い数羽のカラスが、それを食べるようになった。朝食後八時半頃、決まってカラスたちはニームの木に集まって来る。ルームメイトのラタがベランダに出ても、そっけない態度。私が出て行くとカアカアとかまびすしい催促の声がする。カラスは言われているように、本当に人を識別することができるのだろうか。

インドのカラスは、甘いお菓子よりもナムキン（カレー味のスナック菓子）の方がお好みだった。首の部分が灰色で、口ばしも日本のカラスよりもずっと細くて小さい。体も小柄である。

インドでもあまり好まれる動物ではないようで、ラタは私がカラスにエサをやることに、最初は驚いている様子だったが、次第に「あなたのお友達が来てるわよ」と言って、からかうようになった。

何度も要求の手紙を書いた末、五カ月経ってようやく、ラタにも私にも一人部屋が与えられることになった。この部屋に移ってから、一匹の白猫が私の新たな友人になった。

寮には、猫の家族が住みついていた。食堂か

ら残り物が出るので、使用人たちがそれを食べさせているらしかった。当然とはいえ、インドの猫は香辛料のきいたカレー料理を食べる。

白い猫をキャンティーンで見かけた時、食べ物をやったりしていたのが、いつのまにか部屋までついて来るようになった。それで、毎朝食堂で配給される紅茶用の牛乳を与えることにした。「シロ」と名前をつけて、部屋には入らないように躾をした。隣室のチットラから嫌がられることもなく、戸口の前でいつもおなしく座って待っていた。

チットラによれば、シロは、私が二週間の南インド旅行に出かけていた間、毎朝待っていたそうである。帰ってみると、シロは寮からいなくなっていた。それ以来、一度も姿を見かけなかった。

インドでは、ペットを飼っている人の数は非常に少ない。それも私の知る限りでは、犬だけのようであった。飼い犬よりも、野良犬の数の方がはるかに多く、キャンパス内の日陰でのんびり昼寝をしている姿をよく見た。それに比べて、飼い犬の方は、屋敷内に一日中鎖でつながれているためか、人が通るたびにほえる。

部屋を訪れる動物で、どうしても敬遠せざるを得なかったのが猿である。ヒンドゥー教には、ハスマーンと呼ばれる猿の神様がいる。二大叙事詩の一つ『ラーマーヤナ』にも登場し、主人

公のラーマ王子を援助する勇気と知恵を具えた、人々に人気のある神様である。

ところが、大学街の近くにある丘陵からやって来る猿たちは、なかなか厄介であった。彼らのお目当ては、食べ物である。開け放した窓から侵入して、果物やスナック菓子を失敬していく。食べ物がなかった場合には、部屋中めちゃめちゃにされたりするという。

私も一度、外出中に干していった蒲団に手（足？）形が残っていたことがあった。もう一度は、隣のベランダづたいに逃げて来た猿とたまたまハチ合わせした。必死の思いで、そばにあったほうきをつかみ大声をあげた。幸いにも、それ以降は被害にあうことはなかった。猿の方も、抵抗あるいは攻撃を受けた部屋には、二度と近づかないということだった。単なる悪戯のつもりかどうなのか、わからない。猿に襲われた話も聞いた。

この場合、動物と人間の生活する距離が近すぎて、起こる事なのかも知れない。猿にはどうも親しみを感じられなかった。

インドでは、動物をペットのように可愛がるという感情は、存在しないのではないかという印象を持った。輪廻転生を信ずる人々にとって、動物も同じ生物として、人間と同じ枠組でとらえられているのではないだろうか。生前のカルマ（業）の如何によっては、来世に動物として再生する可能性だってあり得る。

愛玩用として動物を飼うというのも、人間と動物とははっきり異なるもの、人間の方が、動物より優るものとして考えられているから、成り立つ関係ではないかと思われた。

インドでは、サンサーラ（現世）で生きていくことは、動物であっても、カースト制度に束縛される人間であっても、ある意味では同じことなのかもしれない。

クリシュナ・ムールティ神像のこと

東方研究会専任研究員　及川弘美

1

クリシュナ神はヒンドゥー教の代表的な神のひとつです。インドでは、この神様にまつわるさまざまなエピソードがあり、それをモチーフとした民芸品や工芸品、また絵画などが、いたるところでみられます。そして、これらのエピソードの舞台となったのが、私が昨年二ヵ月程（一九八九年八月～十月）滞在したヴリンダーヴァンというところです。

ヴリンダーヴァンは、デリーとアグラとの間、ややアグラよりのヤムナー川右岸に位置しています。人口約二万人の小さな田舎町ですが、クリシュナ信仰の聖地であるため、この地をめざしてインド中からたくさんの人々が巡礼に訪れます。寺院や社（やしろ）の数も非常に多く、その数は大小とりまぜて四千にものぼるといわれています。それらの寺院の大半はクリシュナ神を祀っています。

そして、そのような寺院の一つにラーダーラ

マンというお寺があります。このお寺には、身の丈六〇センチメートルほどのクリシュナ神像が祀られています。この神像は、黒い大理石でできており、全身黒光りしています。フルートを吹くポーズをとったその像の頭には、孔雀の羽と黄金で造られた王冠や装飾品で派手に飾りたてられています。その表情は、黒い顔の中に見開かれた眼だけが異様に白く、不気味に見えます。見る人を和ませるような重量感や静謐さを湛えた日本の仏像とは、全く対称的です。

2

ご身体（神像）のことをサンスクリット語やヒンディー語で、ムールティといいます。インドでは、ムールティはきわめて大切に扱われます。なぜなら、ムールティは、単なる神様の姿に似せて造られた偶像ではなく、神そのもの、あるいは神が顕現した姿と考えられているからです。つまり、ムールティは神とイコールなのです。ですからムールティはあたかも生きているかのように、毎日大切にお世話されます。毎朝、沐浴がなされ、美しい絹の衣が着せられ、そして水、花、果物、食事などが捧げられます。

これら、ムールティに捧げられた品々は、神からのお下がり（プラサードゥ）として参拝（ダルシャン）にきた信者に配られ、また、沐浴に使われた水は、聖水として信者に振り掛けられたりします。ラーダーラマン寺院では朝は四時半、夕方は六時四十五分頃の二回のみ参拝が許され、そのときだけクリシュナのムールティを拝すことができます。

私も何度か参拝にでかけました。そして、信者たちが礼拝する姿をまのあたりにしました。かれらは、裸足で寺院の建物の周りを時計まわりに一周してからムールティが祀られている講堂に入ります。入るときには、入口のところで

右手をつきその手を自分の額にあてて礼をしてから中に入ります。もちろん、このときも裸足です。講堂の正面は舞台のように高くなっており、その中央に美しく着飾ったクリシュナが鎮座しています。かれらはまず、クリシュナに向かって床に跪いて額を床に付けるか、五体投地または八体投地ともいわれる最高の礼をし、それから立ち上がり両手のひらを組んで祈ります。興味深いことに、かれらはその際、眼だけが異様に目立つあのクリシュナのムールティと、しっかり眼と眼を見合わせるのです。まるでこの世の最高の美に遭遇したかのようにしばらくの間うっとりと、そして熱心に見つめるのです。その姿は、実に真剣そのものでした。祈りを終えるとお賽銭をあげます。そしてバラモン僧から手のひらに聖水とトゥルシー木の葉を受け取ります。それから聖水を一口飲み、残りを頭にふりかけ、プラサードゥのお菓子をもらいます。出る時も、入ってくる時と同様に礼をして去ります。

3

ところで、正直言って、私にはあのムールティがどうしても神聖な崇拝の対象として見ることができませんでした。それどころか、あんな人形の様な像に熱狂的に信仰を捧げる人々の気が知れない、とても自分には理解できない世界だ、という気持ちで一杯でした。私はそれまで、手を合わせるという場合、その対象はまず第一に亡くなった祖父母とかご先祖様でした。神は、目に見えないもの、姿なき手の届かない存在で、そこになにか神聖さがあるように思われました。だからムールティを熱烈に崇める信者たちの姿が、私には、異様な狂信的なものとしてしか見えなかったのです。

しかしかれらと接し生活を共にしていく中

で、かれらヒンドゥー教徒が決して狂信者なのではないということが、少しずつ理解できるようになりました。かれらにとって神はごく身近な存在であり、同時に自分の内にもかれらは、それぞれの神を持っているのです。そのような人々にとって、ムールティの姿・形は問題ではないのです。より大事なのは、どのようなムールティであろうと、それがムールティである限り、神の姿そのものであるということなのです。

（つづく）

●第六回派遣僧入選論文

「禅の国際化と私の役割」

――客員教授としてスリランカ仏教徒に対する啓蒙――

城西大学教授・文博　森　祖道

スリランカの仏教は、西暦紀元前三世紀のアショーカ王の時代に、インド本土より伝来して以来、ざっと二千二百年以上の伝統を誇っている。しかもこの国のいわゆる上座部仏教は、釈尊自身の仏教に直結する正統派と彼等が固く信じ、かつ他の南方上座仏教諸国のルーツであるという歴史的自負に支えられている。しかしながら、スリランカ仏教は栄光と隆盛の歴史だけでは決してなく、幾多の栄枯盛衰、粛正と堕落の反復であった。特に近世以降、この国はポルトガル・オランダ・イギリスと続く西欧キリスト教国の植民地支配を長く受け、その間のキリスト教徒による直接間接の弾圧迫害の結果、仏教は滅亡の危機に瀕したこともあった。

第二次世界大戦後のスリランカの独立回復は、彼等の伝統文化と不可分である仏教をその精神的支柱として達成され、仏教は立派に復興された。そして昨年には、この国はついに憲法を改正して、仏教を正式に「国教」と定めたのであった。

しかしながらその反面、彼等の上座部仏教は、独立後四十数年を経た今日、ようやく新しいきざしを見せ始めている。それは彼等の間に次第に日本の大乗仏教、特に禅に対する関心が高まりつつあることである。例えば、最近、曹洞宗系のスリランカの比丘の努力で、この国に禅宗

様式の坐禅堂が初めて建立されたことなどはその好例である。これなどは、今から二十数年前に私がこの国に初めて留学した時代には、到底考えられなかった新しい傾向である。またスリランカの比丘が何人も日本各地で禅を学び、日本仏教・大乗仏教を研究しているのも同様の事例であろう。そしてこの様な新しい動向は、近年の国際化、情報化社会の進展と、戦後世界におけるわが国の驚異的な経済進出と地位の向上という状況と決して無関係ではあるまい。

右に説明した様な上座部仏教国スリランカの日本仏教・大乗仏教への新たなる関心の、別の事例として理解出来るのが、今回私が関係を持った大学における日本仏教講座の創設という問題である。すなわちそれは、国立ケラニヤ大学のパーリ学仏教学大学院（Post graduate Institute of Pali and Budahist Studies）に日本仏教関係の講座を新設して、日本人学者を客員教

授として招いてその担当者とするという計画である。現在の時点で、この計画がスリランカの大学にとっていかに画期的な試みであるかという点について、次に若干の説明を加えておきたい。まずその第一点は、従来のこの国の仏教学は、ほとんどパーリ語文献に基づく原始仏教・上座部仏教の研究だけであり、わずかに大乗仏教の研究であったとしても、それはサンスクリット語文献に基づくインド大乗仏教の研究にはほぼ限定されていた。従って「漢文系の日本仏教」についてはほとんど何も知られておらず、また彼等は知ろうともしなかった。今回の計画はこの壁を初めて破ろうとするものである。第二点は、独立後のこの国の大学においては、少なくとも人文・社会科学系の学問分野に関しては、国語たるシンハラ語（ないしはタミル語）による授業のみを許可し、英領時代からの英語による授業を禁止した。かかる措置を採ることによって、植民地時代から残っていたイギリス人などの外国人教師を一掃して来たわけである。これは彼等のナショナリスティックな国民感情の現れであり、従って恐らく英語によってしか講義の出来ない日本人学者が教授する機会も全く閉ざされていたのである。ところが例え大学院レベルの限定された機会とは言え、ケラニヤ大学の「英語による授業のコース」の今回の新設、及びそれによって実際に初めて可能となった、日本人を含む外国人学者の受け入れは、この点で実に画期的な改革なのであって、責任当事者の識見は高く評価さるべきであろう。現にこの改革によって、当大学院は日本のみならず、同じ大乗仏教の国、台湾との交流も画り、今年より早速、台湾からも客員教授を招聘したと聞く。第三点は、スリランカの大学の悲しむべき現状に関してである。時折、報道されている様に、スリランカ国内は目下、シンハラ人対

タミル人、あるいはシンハラ人の過激派ゲリラによる内紛抗争が長期化し治安も必ずしも良くない。過去二、三年の間、この国の全大学は閉鎖されていたが、最近になってようやく正常化されて授業は再開された。しかしこの混乱の後遺症は重く長く後に尾を引くものと推察される。しかしとにかくこの混乱の中で、ただ唯一の例外がケラニヤ大学のこの大学院であったのである。ケラニヤ大学自体も、コロンボ郊外のケラニヤにあるそのメインキャンパスは、最近まで閉鎖されていたが、右の大学院だけは、コロンボ市内の別の独立した敷地に設置されている事情も幸いして、とにかく終始、正常な教育研究活動を続けていたのである。この様な非常に困難な国情の中で、この大学院が新しい試みを着々と実行に移していく積極的姿勢は全く貴重である。従ってわれわれもこの様な時期にこそ、国外よりもこれに対して出来る限りの援助

協力をする必要があると考えるのである。

さて次には、いささか私事にわたって恐縮であるが、本題との関連で私自身のことについて若干の説明をする。

私はかつて高校卒業後、五年の間、大本山総持寺などにおいて禅の実修をし、その後、駒沢大学の禅学科を卒業した。そして東京大学大学院に在学中に、スリランカに留学しパーリ語文献や南方仏教の勉強をした。以来、スリランカの学者とは学問的交流を続けているので、この因縁によって、今回の招聘が実現したわけである。彼等は、私が日本の学者として日本の仏教とスリランカの仏教の両者について知識を有するので、講義に際しては、この両者を比較する視座より講ずることが可能であり、そのことによって学生の理解を容易ならしめるものと期待している様である。このことは私への招聘状の中にも述べられている。そしてこの様に、外国人に対して自国の伝統文化や精神的所産を教示する場合には、相手側のそれらや国情などによく通じていることは本当に大切なことであると考える。

大学院で私が講義する講題は、(1)日本における禅仏教、(2)日本の仏教文化、という二題である。当大学院には、専攻課程、修士課程、博士課程の三コースがあり、これがそれぞれ「英語による授業のクラス」と「シンハラ語による授業のクラス」とに分けられている。私は今回「英語によるクラス」の専攻課程と修士課程の学生を対象として講義する（博士課程は論文作成の指導だけで授業はない）。当初の予定では、私の二つの講義は右の両課程に一つずつ振り分けられるはずであったが、先方の希望で、この両課程の学生の合同クラス（約四十名程の予定）を臨時に作り、両方の学生に講義を二つとも聞かせる様な措置が取られることになった。この点

にも彼等の期待の大きさが感ぜられ、責任の重大さを痛感する。

伝統的な上座部仏教の国、スリランカの大学に初めて日本仏教の講座が開設され、しかも禅が初めて、教示される機会が訪れたことは、私個人はもとより、少々大げさに表現すれば、わが国の仏教にとっても正に画期的なことで、その歴史的意義は小さくないと考える。勿論その講義内容は「対機説法」的でなければならないので、初歩的啓蒙的なレベルを超えることはあり得ないであろう。しかしとにかくスリランカの仏教徒大学院生を対象に、日本の禅と仏教文化について講ずることは有意義なことと考える。この国の大学や大学院への進学率から考えても、彼等がエリート中のエリートであり、将来の指導者となる存在であることは間違いない。しかも聞くところによると、その大学院生の中の約半数近くは上座部の若き比丘たちである。出家在家を問わず、私の講義の受講生の中から、将来、スリランカの仏教を担い、日本とスリランカの仏教交流に尽力し、そしてもしもスリランカに日本の仏教、特に禅を広める様な人物が出現するとすれば、それこそは私の本懐である。

●第八回派遣僧入選論文

「禅の国際化と私の役割」

曹洞宗宗学研究所員　安藤嘉則

米国における禅の歴史は、もうかれこれ百年にならんとしている。即ち一八九三年、シカゴにおける「世界宗教者会議」において、実に三十五歳という若さの円覚寺派管長の釈宗演が出席・演説し、続いて宗演のもとで参禅していた英語教師鈴木貞太郎（大拙、当時二十七歳）が、アメリカの中央部のイリノイ州ラサールに派遣されている。その後、佐々木指月居士らによって禅堂がはじめてアメリカにできてからは、洞済の両宗が積極的に布教活動を展開し、今日ニューヨークや、ロサンゼルスを中心に禅の普及がなされている。この一世紀の間、まったく精神的風土を異にするかの地にあって、開教師として伝道に努められた先人の言うにいわれぬ労苦には、全く頭の下がる思いがする。

ところでキリスト教的社会・風土にどっぷりつかった西欧人たちが、このように禅に対して深い関心をもつに至ったのは、確かにこれら日本の先徳に依るところが大きいのであるが、同時に西欧人たちの内面的な変化によって、禅へ

の希求がある程度必然的なものであったことも注意すべきであろう。

この一世紀の間にアメリカのキリスト教会も大きく変化してきた。特にヨーロッパ的キリスト教会の伝統に対する不信から、W・ハミルトンやH・コックスらによるキリスト教再生運動が展開され、「教会の透明化」が叫ばれたことは大きな波紋を投げかけた。

またあるカトリック神父は「神学は死んだ」と論ずる。これはまさに揺れ動く現代社会と、そこに生きる人々の多様な価値観に対応できずにいる神学の現状を自己批判した言葉であろう（これは全く現在の仏教学・宗学にもあてはまりそうであるが……）。

また社会的には、ベトナム戦争の敗北によるアメリカ人の意識の変革というのも、大きなものがあったであろう。ちょうどこの頃、既成のアメリカ社会から逸脱したアウトサイダー、いわゆるヒッピーなどが出現し、青年層におけるサイケデリックな文化が各方面に広がっている。

こうしたキリスト教や現代社会に対して満た

されぬ人々に道を拓いたのが、まさしく禅であったのである。彼らの禅に対するアプローチの仕方は様々である。ＬＳＤを常用しながら、あやしげな瞑想にふけるヒッピーたち、一方雲水に身を投じ、禅に真正面から取り組んでゆこうとする者、それぞれであるがこれらの一群の人々とは対照的に、キリスト者からのアプローチがとりわけ注意される。

例えばルーベン・アビト氏は、一九七四年六月、上智大学で行われた連続講演会「禅とキリスト教の対話」の中で、次のように述べている。

「何を申し上げようかちょっと困っておりますけれども、結局わたしが老師のところに何を学びにきたのかということから始めたいと思います。それは正直に言えば、仏教のことでもなく禅宗のことでもない。それは何かというと『味わうこと』というふうに言えると思います。……中略……もう一つ、私がキリスト者として坐禅をやっているのをみて人が私に聞くわけですが、どういう態度で坐っているのかということ。私は坐禅でよく言われる三つを繰り返しているだけです。すなわち身体を調えること、呼吸を調えること、そして心を調えることです。只管打坐というのはこれです。これは神を待ち望むことにほかならないと思います。そして待ち望んでいるものがもうすでに来ている、現れている、働きかけているということが、新しい世界の誕生だと思っております」

アビト氏は当時東大の印哲において印度仏教を研究されていたが、本来はイエズス会の神学生であった。氏の禅に対するアプローチの仕方は、あくまでキリスト者であることを前提とし、キリスト者として神に出会うための有効な手段として坐禅が用いられているのである。キリス

ト者の中でも特にカトリック系の神父・信者は禅に関心を示し、約二十年程前には、日本でも奥多摩の秋川渓谷にカトリックの禅道場、神冥窟が建てられている。このようなカトリックの禅に対する接近は、他の諸宗教と対話する姿勢を打ち出したバチカン第二回公会議によって促進されたものであるが、確かに禅の僧堂生活とカトリックの修道生活とは、千年以上の異なる歴史にもかかわらず、共通するものが多いと思われる。

むろん、このような相互の交流について批判的な意見も多いであろう。日本の伝統的な禅の宗風を重んずる人々にとって、このようなキリスト者の方便的坐禅は全く受け入れがたいであ

ろうし、またつい先日、ローマ法王がカトリック教徒があまりに東洋の諸宗教に近づくことに批判的な見解を示した、という記事もみたばかりである。

これらの意見は、両者の宗教的なエッセンスやその文化があまりにも接近しすぎると、逆に相互の宗教的伝統、ひいては相互のもつドグマ・教義さえも損なってしまうという可能性を危惧したものであろう。

これはまさに正論ではあるが、このように固定的な教義にこだわり、排他的である限り、今テーマとしていただいた「禅の国際化」そして相互理解というものは成り立ち得ないであろう。

まことに教義・ドグマというものは両刃の剣である。それは宗教の根本原理であり、仏教が仏教たりうるのもそこにある。しかしこの教義も、仏教者として今ある私がどのようにこれを受けとめて生活し、そしてどのように実践していくのか、という点が見失われていたならば、何の意味ももたないのではなかろうか。少なくとも仏教そして禅の今日的意義は存在しないと私は思う。

かつて唯識思想を勉強していた頃、三性説なる理論について種々の論書を読んで検討したことがあった。実に巧みな比喩としトリックが駆使されて、さとりの構造が解明されている。しかしそれは私にとって知識の充足はあったものの、存在感のない全くの画餅であったような気がする。この教義を具体的にどう生かしていくのか、そして生活していくのか、という点が、当時の私には全く不明であったからである。

この点について去年豊山派宗務庁における同和研究会で、駒沢大学の奈良康明先生がなされた業論に関する研究発表は、私にとって実に示唆に富む内容であった。とりわけ、業論を一般

的業論と自覚的（実存的）業論に分けるという視点。そして「すべては私の業だ」と受け取め、そこから業を克服する宗教的生き方を生み出す「自覚的業論」も、それがひとたび一般化されたとき、差別につながっていく、という分析は、私々の教理に対する平面的な理解に重要な提言を与えているように思えるのである。

まさにそれぞれの教理は、祖師方がその宗教的体験の深みから発露した表面的部分であって、我々はその教理の奥にある本来の実存的基盤につねに立ち返って追体験しなければならない。これは実際のところ容易ではないが、常にその方向を見失わずに仏教者として心したいものである（研究者としてではなく）。

だいぶ脇道にそれたかもしれないが、アメリカの禅について再び一言したい。ニューヨークに二つの禅堂を開単した臨済宗のある師家は、アメリカの禅を、祖師が数多く輩出した唐代の禅に似たものがあると述べている。これは少し（というよりはかなり）ほめすぎのきらいもあるが、日本における曹洞・臨済の僧堂生活が、住職になるための一手続に堕し、もっぱら葬祭や仏教学ばかりが前面に出ている現状をみる限り、自発的主体的に僧堂へ飛び込んでくるアメリカの禅は、本来のあり方に近いのかもしれない。そして伝統にとらわれない、新しい時代に対応すべき禅のあり方が、そこに生まれつつあるのかもしれない。これが日本における禅の新しい教化に有用であるか、否か、まだ一度もその地を踏んだことのない私が語るべき資格はもたないが、もしその機会が与えられるならば、是非かような視点をもって、アメリカの禅を体験してみたい。そして願わくは、自己閉鎖的な日本の禅のあり方に対して、何か一つでも活性化させられるものを提示できれば、と思う次第である。

●第六回派遣僧入選論文

「禅の国際化と私の役割」

大本山総持寺安居　浅井宣亮

近代以後、西欧では宗教の世俗化が進行して、信仰心が薄らいできているといわれる。確かに、科学万能主義・合理主義が浸透し、科学の発展により将来理想社会が実現すると多くの人々が信じていた近代においては、それは事実だろう。人は苦悩と解消する役目を果たすものとして、宗教より科学に魅力を感じるようになった。そして合理主義的思考により、「神」の存在を疑問視する人は増加し、「神は死んだ」とさえいわれるようになってきた。

しかし現代になると、社会の矛盾がいろいろ露呈するようになり、状況は変わってきた。科学により理想の社会を造ることが可能かどうかという問に対し、イエスと答える者はもはや少数になりつつある。

人は矛盾的存在で弱い生き物であり、常に多くの悩みを抱えながら生きている。近代以前は、宗教に頼ることでその苦しみから逃れようとしてきた。そして近代になると、科学にそれを求める者が増加した。が、現代ではその両者とも

期待を裏切ることが多くなり、頼るものを見失った人々は漠然とした不安にさいなまされている。

科学には限界が見え始め、未来はバラ色という夢は結局夢でしかなかったと感じられるようになった。そうかといって合理主義的思考方法

を教えられた者は、「神」の存在を純粋に信じるといった無垢な心はもはや多くは持ち合わせてはいない。こういう状況の下、東洋思想・インドや仏教の哲学・神秘主義などにその打破を求める者も現れてきた。「禅ブーム」などと呼ばれたものも、この風潮にのったものだろう。

「禅」は鈴木大拙氏により伝えられ、その道元の黙照禅系の考えは、欧米の知識人に非常に歓迎されている。そして西欧的思考とは次元を異にする新しい精神の救済方法・いのちのよりどころとして大いに期待されている。

では「禅」の特色とは何であろうか。禅宗も一宗教ではあるが、坐禅という修行方法自体にその焦点を当てていることにその独自性が見られる。信の宗教と対照的な行の宗教である。この「行」ということを中心に置くということは、現代にあって非常に重要な意味を持ってくる。疑うことなく信じるということは、現代人にと

って難しい。が、坐禅をするということは容易にできる。つまり、「信」から宗教に入っていくことには抵抗をみせるが、行をすること自体には何ら問題はない。宗教の世俗化がいわれる現代においても、「行」をきっかけにして宗教心を興すという道は十分広く残されている。

実際北米では、禅宗と対照的な信の仏教といえる浄土真宗が、布教活動の一環として坐禅を取り入れている。またキリスト教においても、世界教会運動などにカソリックと禅の結びつきを見ることができる。これ以外にも、禅と他の宗教との結びつきは数多く見つけられる。このように、身心一如という禅の特色は現代において人々の信仰心を高めるための方法として重要な意味を持ってきている。

そのことは、布教方法にも現れてくる。道元禅師は「痴老の比丘黙坐せしを見て、設斎の信女悟りを開きし……」と示しているが、これは端的な例となるだろう。つまり言葉による布教以上に、人から人に直接伝えるという布教の形を重視する。およそキリスト教など信を前面に出したものでは、まずその説明から始まる。聖書などといった、その信仰を明確に述べた書などが布教活動の中心とされよう。こういう書物に書かれていることを理解納得させることが、すなわち布教である。そこでは布教師は、いかに一般の人に内容をわかり易く説明するかという役を担っているだけであって、補佐的な役割を果たす。あくまで主となるのは、キリスト教であれば聖書である。

また新興宗教の場合、素人である庶民信徒の布教や学習を支援するためと、組織の経営に資するために、いわゆる間接布教（出版やラジオ放送）を発展させる集団が多いことがその組織上の特色の一つになっている。これも言葉を使用した布教であるが、教義を理解納得させるこ

とがある程度容易で、それが即布教となるものの場合は、多様な布教方法が考えられる。

これに対し、道元禅は正伝の仏法という立場を取っている。釈迦牟尼仏より師資相伝してきた正しい仏法、すなわち仏陀が衣法を摩訶迦葉に付嘱し、それより西天二十八代目の達磨大師が中国に伝え、東土六代曹渓慧能大師にいたり、歴代の祖師が相伝相承され、ついに如浄禅師より道現禅師に相伝された只管打坐の坐禅を意味するのである。その教義は言葉で説明することは難しく、書物に著しづらい。そのため人から人へ直接伝えるということが必要であった。またこれからも必要であろう。「普勧坐禅儀」「坐禅用心記」は主に方法論を述べているのであって、聖書とは内容を全く異にしている。「正法眼蔵」にしろ、その難解さで有名であり、民衆にも意味が容易に分かる聖書などとは全く対照的である。

禅宗では、布教師は教義を伝える補佐的な役を果たすだけのものではない。宗教活動のあるじとなるべきものである。そして真の布教には人が不可欠であるのだが、現在その指導者の数はおよそ十分であるとは言い難い。私は未熟であるが、将来諸先輩方のように国内国外を問わずに布教活動の一翼を担えるようになりたいという意志は強く持っている積もりである。海外での修行体験はそのためには不可欠だろう。その上それは海外において布教する時に役立つだけでなく、日本における禅の国際化にも大きな手助けとなるに違いない。海外では、日本の修行僧ということで辺りの刺激になり、日本では逆に海の向こうで禅はどのように受け入れられているかを示すことにより辺りの刺激となり、禅の国際化に力を尽くすことができれば真に幸いである。そうすることが私の役割だと信じている。

●第八回派遣僧入選論文

「禅の国際化と私の役割」

発心寺専門僧堂安居　沖田玉映

『大慈恩寺三蔵法師伝』の一節に次の如き記述がある。

法師はここで菩提樹と慈民菩提が作ったシャカ成道の像を、至誠をこえて礼拝し、五体を地に投げて悲哀懊悩し、自ら嘆き悲しんで、「シャカ成道のころ、私は何処でどのような生を送っていたか自分でもわからない、いま像季に至ってようやく、この地を訪れることが出来た。思うに私は何故かくも罪業が深いのであろうか」と悲涙を目にみなぎらせて泣いた。

丁度その日は夏座のとかれる日で、遠近の衆僧が数千人もここへ集まってきていたが、法師をみてもらい泣きせぬ者はなかった。(巻の第三、長澤和俊訳)

この法師とは、かの有名な『大唐西城記』の著者、玄奘三蔵法師である。

玄奘法師は、はるか釈尊在世とは約一千年も隔だてていながらも、はるか彼方の聖地を訪れてみたいという気持ちは、生命の危険にあって

も止めることは出来なく、苦難の旅路を辿り、十六年間、求法の旅となるのである。カピラ城やベナレスの鹿野苑、マカダ国の遺跡には特に感激し、釈尊が始めて悟りを開かれた菩提樹下の金剛座は、二百年に訪れた法顕は六尺四方で高さは二尺であったと伝えていながらも、土砂に埋もれて見えなく、あまりの荒廃ぶりに号哭し、涙を流しながら五体投地の礼拝をされ、回りの僧達が貰い泣きしたほどであったと伝えられている。その頃の中インドは多く寺院や遺跡は荒れはてて、残っている寺の多くは小乗仏教や外道の寺となっている。

そして玄奘法師はさらに大乗教学の中心、ナーランダー寺へと旅を続けるのであった。

印度仏教は、釈尊入滅百年後には、保守派の「上座部」と進歩派の「大衆部」に根本分裂し、さらに細分化され、約二十部の部派仏教が生じた。南スリランカ、ビルマ、タイ等に伝わった

仏教は上座部系の南伝仏教と言われている。

これに対して部派仏教（旧来のアビダルマ仏教）を批判したことから大乗仏教が生じたのではないかといわれている。これを北方仏教といい、現在、中国、日本に伝わっている。

しかし現在のインドには、釈尊の遺跡は形骸のみをとどめ、多くはイスラム教徒に変容している。また中国も文化革命後、宗教の自由を認めながらも日本の信仰の自由と内容は異なり、伝道布教は許されず、僧侶達は伽藍の管理者の如き存在となっている状態である。

しかし近来、世界の大宗教から見れば、微々たるものかもしれないが、欧米に仏教が拡がりつつある。某誌に次のような一節が書かれている。

はるか昔は印度へ玄奘や義浄の中国僧が遊学し、そして日本から入唐入宋した。しかし現在は逆のコースを辿っている。近い将来はヨーロッパ、米国へ日本僧が仏教を学び修行に訪れるだろう、と。

日本において一般に〝仏教〟と聞くと「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり」と栄枯盛衰、生死流転の無常を連想させる。

高祖道元禅師については『伝光録』に次の如く、

八歳の時、悲母の喪に逢ふて、哀嘆、尤も深し、即ち高雄寺にて香煙の上るを見て生滅無常を悟り、其より発心す

と記されている。三歳の時、父、久我通親の死に逢い、次いで最愛なる母を八歳の折に失い、幼いながら人生の無常を感じ発心される。さらに『随聞記』第一には、

貧欲なからんと思はば、先づ須、吾我を離るべきなり、吾我を離るるには、無常を観ずる、是第一の用心なり。

と記されている。煩悩を起こす貪瞋痴の三毒

を無くすためには吾我を離れよ、我見を捨て執着から離れるには、まず無常を観じることである。ここでの無常観は、従来のもののあわれ、悲哀の世間無常、清緒的無常をさらに進め、無常即仏性に目ざめることである。

西洋と東洋の思想形成の異なる中で欧米における仏教思想、特に禅の拡がり、又それがどのように受容されているか興味深く思える。逸早くフランスに禅が受容された背景として、西洋のとちの木と称するフランスのマロニエの並木路は有名となっている。ある季節になると霧に街が見えなくなる程に覆い包まれる。霧が晴れると今まで紅葉していたマロニエの葉が一枚も無くなり、風と共に枯葉が舞い上がると話を聞き、フランス人にこの話を尋ねてみると、そのとおりという。

この自然の営みの姿から、日本の落葉のイマジネーションよりも、はるかに強烈に無常を膚で感じて、禅を受け入れ易かった理由の一つにならないだろうか。

釈尊から仏々祖々の師資相承された法は、国境、文化、思想に無関係に普遍であり、世界中ありとあらゆる処に法は遍在している。時々刻々と時の流れている中、どのうよに禅が西洋で受け入れられているか、是非とも四弘誓願の精神をもって直接、中に入って修行したいと切に願っている。

●第八回派遣僧入選論文

「未来社会の仏教と私」

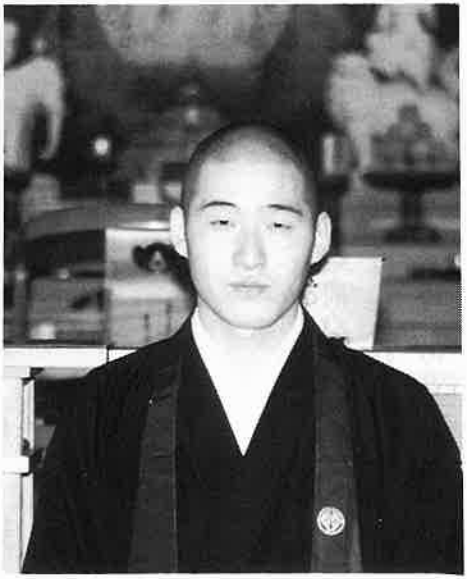
――原始仏教からのメッセージ――

大本山増上寺研修生　三宮睦穂

「釈尊に帰れ」という言葉を私が初めて耳にしたのは、今から数年前のことだったと思う。僧侶の堕落、そして葬式仏教といわれる仏教に対する皮肉であり、戒めであり、奮起の言葉であります。当時、私も一人の僧侶として、そのあり方に疑問を持っており「これでいいのか、これでいいのか」と、自分自身の中で暗中模索しておりました。そんな中「釈尊に帰れ」というこの言葉の響きは、私にとって、とても魅力的なものであり、何か一つの光を与えてくれるような、そんな予感をさせる言葉だったのであります。そしてその言葉通り、一からの釈尊の教えを、ひもといてみようという想いにかられたのです。これが、私の原始仏教との出合いでありました。そして、そこに説かれている教えを学んでいくにしたがって、私が、イメージしていたそれまでの仏教とは、だいぶ異なった仏の教えが現れ、それは私にとって全く別の新鮮なものとして映し出されたのです。と同時に、釈尊の説かれた教え、精神を素直に受けとり、

それを未来の人々へ受け渡していかなければならないのだということに、思いがするようになったのです。

原始仏教とは、時期的にいえば、釈尊がブッタガヤの菩提樹の下で、悟りを開いた時から、クーシナガルにて入滅し、その後数百年までの間の仏教のことをいい、いわゆる大衆部と上座部との根本分裂がおきるまでの仏教のことです。そして、その教法とはまさしく現実的であり、即時的であり実証的であり、いわば常に現実を素材とするものであり、現実に立脚する教えであったと思うのです。



釈尊、存生の頃、インドの地において時の宗教家・思想家が好んで問題としていた事に四類十種の難というものがあります。いわゆる十四無記といわれるものです。

1・世間は常住であるか、無常であるか（常住であってしかも無常であるか、常住でもなく、無常でもないか）

2・世間は有辺であるか、無辺であるか（有辺であってしかも無辺であるか、有辺でもなく、無辺でもないか）

3．身と命とは、同じであるか異なるか

4．人間は、死後存在するか、存在しないか、存在して、しかも存在しないか、存在するのでもなく、存在しないのでもないか。

これらの問題に対して、釈尊は、それを問題にすることが、仏教の実践において、無意味であることを、原始仏教の代表的な経典「阿含経典」の中において「毒箭の譬え」をもって功みに説いているのです。あえて、今ここにその一節を紹介したいと思います。

ここに一人の人があって、毒矢をもって射られたとする。その時、彼の友達は、いそぎ彼の為に医者を迎える。ところが、彼はまず、わたしを射た者は何びとであるか、わたしを射た矢は、いかなる弓であるか、又その矢はどんな形をしているか。それらのことが解明されぬうちは、この矢を抜いてはならぬ、治療してはならぬと、主張したならば、どんなことになるのだろうか、彼はまだそれらのことを知り得ないうちに死んでしまうであろう。世界は有限か無限か、霊魂とは身体は同じか別か、人間は死後も尚、存在するか否か、そのような問題に答えたとて、われらの苦なる人生の解決にはなり得ないのだ。われらは、この現在の生において、この苦なる人生を克服しなければならぬのである。

――中部経典六三摩羅迦小経
中阿含経二二一箭喩経

これによって見るならば、釈尊が常に問題とするところは、現実の人間のものであったということが、明瞭であります。釈尊においては、超経験的なことを論ずるということは、すべて、無記であり、問題として論じてはならないことであり、戯論であるとして排斥せられているのです。そして、その教えの説き方は極めて現実的であり、かつ人間的であり、そこにはまさし

く生活に即した仏教が語られているのです。又その求めるものは、今をいかに「明るく」「仲よく」「正しく」生きるか、いや生きぬくかの『共生』の一言に尽きるのだと思います。

今の日本は、経済的には恵まれた状態にありますが、世の中に不正や腐敗が多くみられ決して精神的には豊かでないことは常にいわれていることです。又現在の日本の仏教のあり方についても客観的な目で観察して見ると、少なくとも私の目には、よい方向にあるといえない部分が多くみられるように思います。仏教が、今日起こっている社会的な問題に対して積極的な対応が十分になされていないということも一つの原因があるともいえます。又それは、日本の社

会に対しても同様のことがいえます。

伝教大師が、弘法大師が、なぜ命をかけて唐へ渡ったのか。道元禅師が入宋して禅の中に何を求めたのか、法然上人が、日蓮上人が、なに故念仏を、お題目を唱えることを主張したのか。それには、時代時代の背景があり、又一見超経験的なことを説いているかのようにみえますが、その根底には、釈尊が常に今を見つめ現実の問題を解決されようとしたように、各祖師方も、それぞれ、今自分が生きている社会、現実を素直に受けとり、深く自己を見つめ、反省するという立場にたって、

今の時代を、どうとらえるか

今をどう生きるか

今何をなすべきか

今何をしてあげられるか

といったことを常に深く考えられていたと思うのです。それが、「釈尊に帰れ」「祖師に帰れ」ということであり、その中から「未来に釈尊の教えを生かす」「未来に祖師の教えを生かす」出発点になるのではないかと思うのです。そのように、一度、原点に帰ってみることによって、未来の社会に向かって仏のお教えのすばらしさを伝えていくことができるのではないでしょうか。

しかし今の私に一体何ができるのか、何をなすべきなのかということになると、悲しいかな今の私には、まだその答えを見い出すことができない。ドアの前に立っているだけでそのドアをどう開けたらよいのか迷っているのです。それ故に悩み、苦しみ、立ち止まったままでいるのです。今の私にできることは釈尊の教え、祖師の教えを学び守り、その命を受け継ぎ、一人の求道者として生きていくことだと思うのです。この問題を現実をふまえて解決していく方法を見つけたいと考えています。

●第六回派遣僧入選論文

「21世紀の仏教と私の役割」

駒沢大学大学院生　陳　永　裕

20世紀を振り返って見ると、東洋精神は西洋文明の氾濫の中で危機の時代であったと思われる。明治維新を例にして見ても、西洋文明そのものの受用であったことは否定できない。また、アジア諸国の近代化において、その主役たちは多かれ少なかれ欧米に渡って、西洋文化を学びそれを用いて自国の近代化を進めてきたことも事実である。そして、近代化を進める中で、特に教育においては西洋教育のそのままの移植といっても過言ではない。この西洋化された教育の中で東洋の精神は疎かにされて、そのような教育の風土は今日まで続いているのである。

また、近代化の激動の時代に、東洋精神は古き良き時代の精神文化としては意義あるものの、近代社会を担える現実的な活力を生み出せないままに、多くの問題を抱えていたことも認めざるをえない。このことは結局、西洋文明の洪水の中で、東洋精神、特に仏教精神はその危機の時代を迎えるようになったと思われる。

そして、その東洋精神の危機からもはや20世

紀の終盤に入って、西洋化された現代社会は西洋文明の功罪を論じられるようになり、新たに多くの問題を私たちに投げかけているのである。私はここで東西の精神文明の優劣を論じようとするのではない。西洋化一辺倒で走りぬいた現代社会に見るその功罪に鑑みて、疎かにされてきた仏教精神の中から、真の豊かさを取りもどす東洋の心を甦らせたいと思うのである。

西洋の物質文明、東洋の精神文化という表現は語弊があるにしても、18世紀を前後にして西洋社会の急激な物質文明の発展は、精神文化をなおざりにして現代社会を形成して来たのである。この物質文明の発展に精神文化が追い付かなかったところに、現代精神文化の空白があり、心の喪失の時代といわれるようになったのである。それに伴って、物質万能の現実は精神世界の価値を見失う結果を招き、個人主義の進展は他者の存在を軽んずる現状にまで及んだのである。果たして私たちは20世紀の間に何を得て何を失ったのかと問いかけられる。そして、得たものの中には、季節の変化さえも忘れそうな生活環境の快適さとあり余る物の豊かさが挙げられる。しかし、その快適さと豊かさは多くの喪失という犠牲の上に得られたものであることに、やっと気づき始めたのである。個人主義に固められた現代人は、人々との心の交流を通し

ての暖かさを喪失して久しく、あり余る物を作るために、自然環境を破壊して地球規模の公害問題に全人類は直面している。発展の頂点を究めた私たちが、一杯の水を安心して飲むことができず、清らかな自然環境の中で命を育むことができないのならば、何のための発展であったのかを反問せざるをえない。この愚かな発展の道に多くの国々が盲従するのみで、真の豊かさを考える暇を持っていないのである。

ここで私たちは個人の心に還って、20世紀を生きて来た己れの姿を省みなければならない。この意味において、東洋の仏教ほど物質万能を戒めて心の豊かさを求め続けて来た宗教精神は外に例がないと思われる。そして、この「かえりみること」を仏教から定義するならば、欲望を静めて智慧による観察——Śamatha-Vipaśanā——としての「静観」に外ならない。この静観こそ現代社会の中に失われて来た東洋の心であり、仏陀悟りの不変の境地なのである。

人々は「平等」と「平和」のほんとうの在り方については深慮することもなく、ただの合言葉として平等と平和を主張して来たのである。平等の意味を仏教の経典の中から考えて見ると『法華経』の「常不軽」という言葉で象徴されるであろう。常不軽ということは経典に登場する菩薩の名前で、その菩薩は「一切の生命はいずれ仏になれる仏性を平等に持っている」という確信から、相手を絶対に軽んじないことを自分の修行の実践徳目としたのである。現代社会にこの常不軽菩薩は現れないかも知れないが、自分の中にこの「常不軽の心」を培う時に、仏教でいう平和の根本に立つことができると思うのである。このような平等が成就されていく社会において、仏教が意味する真の平和の世界は建設される。そしてこの平和——peace——に相当する言葉を、インドの古典では「śānti」と

いい、漢訳仏典では「寂静」と翻訳されたといわれる。平和の意味が寂静という言葉で表された仏典の教えは、真の平和は「心の寂静」の中で求められるということでも、現代社会に多くのものを示唆していると思われる。そして、今の私たちが心の平和を求めて寂静の世界に安心立命するためには、仏教の「静観」をおいて外に道はないと私は考える。

釈尊は悟りの初めに、寂静静観の中で生命全体の関わり合いの営みに目覚めて、それに目覚めた自分自身を智者であり勝者であり覚者であると宣言したのである。釈尊のこの宣言は傲り高ぶった救世者としての宣言ではなく、生命の営みに目覚めた智慧観察者としての宣言であ

る。この宣言の意味を21世紀の仏教者たちは釈尊の教えの根本として吟味しなければならない。

釈尊の仏教は言説を重んずる仏教でもなく、ましてや宗派に捉われた仏教でもない。今日の仏教はこのままでは21世紀の宗教精神を受容することはできない。立っている脚下(あしもと)は曹洞宗でも日蓮宗でもいいことにしよう。しかし、求むべき精神世界は宗派仏教に遮られてはいけない。私たちは道元を通して釈尊に出会い、釈尊を通して過去仏に出会う。そして、永遠なる如来――tathāgata――に出会わなければならない。そのためにまず、諸悪をなすことなく、衆善を奉行し、己れの心を清めて寂静静観の世界に安住するところに、21世紀の仏教は帰結しなければならないと思うのである。

ここで、21世紀を生きる仏教者としての私の役割を考えて見ることにしよう。

私は二回の出家を経験している。その最初は10代の時であったがその後還俗し、26歳に大学を卒業した秋に再出家したのである。再出家した時の私の心を、今も私は忘れてはいない。その出家の初心というのは、全てのことからの放下であった。そして、私の出家の初心は、韓国の比丘尼禅堂の中で培われたが、その禅堂は最初出家の時に小僧として過ごしたところである。第二の故郷として思われるその禅堂に、私は再出家して放下の心を抱いて、10年振りに戻ったのである。大雄殿の本尊は10年前と何の変わりもない姿で満面に微笑みを漂わせ、私の帰りを喜んで下さった。仏典に出る窮子のような私は、本尊の微笑みに出会い、やっと故郷に戻れた安らぎをその時ほど感じたことはない。私はその夜を通して本尊と語り合い、仏教者として生きることを誓ったのである。

それからまた10年余の年月が経って、現実の

事々に紛れて出家の初心を忘れてしまうこともある。しかしながら、煩悩のどん底に立たされた時にはいつものように出家の初心を思い出して放下の喜びに戻ろうと再発心する。このような私が21世紀を生きる仏教者としてどのような役割を果たすことができるであろうか。

菩薩の行いは「上求菩提。下化衆生」という言葉で象徴されているが、下化衆生というのは「慈悲の実践」という意味に外ならないと思われる。慈悲の実践としての衆生を教化することは衆生と共に歩むことでなければならない。釈尊の教えは命あるものの生老病死の苦悩から出発し、生老病死を解脱して涅槃に入る道の教えである。したがって、慈悲の実践というのは、仏教者がこの生老病死の道を共に歩んで涅槃寂静の世界に案内することであろう。私はこの「共に歩む」ということの中に、私の仏教者としての役割を見出したいのである。それでは、共に歩むということはどのような方法によって実現されるのであろうか。

私はまず、共に歩むことができるよりどころとして修行の道場が必要と思う。人々が家庭や社会をよりどころにして生きているように、仏法は法堂をよりどころにして実践できると思うからである。その法堂を仮に「普光法堂」と名づけて、その中で仏教者は浄信の中で修行し、三衣一鉢の清貧をもって生活する。そして、その法堂からあらゆる法の光を発散すると同時に、仏教者はつねに共に歩むことを念頭において、生老病死の人々に「同道の友」として手を差し伸べる。私はこの普光法堂を守る者として、人々がどのような時にも普光法堂に入って真の安らぎを得るように助けることの中で、私の仏教者としての役割を果たしたいと思っている。

多くの祖師の伝記を見ると、昔からその時代を仏法の末世と嘆いて結社を作って精進した

り、新たな道場を建立してその中で道心を一新することによって、末世の法灯が今日まで伝えられたことに注目する。「僧重則法重」という祖師の言葉は一人の仏教者に正伝仏法を頼む先師の心が響いて来るのである。『華厳経』には「不住の道」を説いて、菩薩がつねに衆生と共に歩む姿を船頭の川渡しに譬えている。

船頭は
此の岸にも
むこうの岸にも　そして
流れの真中にも
住することなく
休まず
人々を渡らしむ
菩薩も船頭のように
生死のこの世にも
涅槃のむこうにも　そして
その真中にも
住することなく
衆生を導いて
安穏の世界に至らしむ

と。

私もいずれこの不住の道を実践する者として、人々を如来静観の世界へ案内できることを、私の仏教者としての最後の役割であると念願するのである。

●第八回派遣僧入選論文

「禅の国際化と私の役割」

東京大学印度哲学科研究生　金　秀　娥

禅というのは、一言でいえば、自分自身を見ることである。すなわち、自分自身を見ることとは、何かといえば、自分のありのままの状態の姿を見ることである。このような観点から見れば、禅を修行するということは、何か新しいことを求めることではなくて、今まで自分がもっていてもわからなかった貴重なことを発掘する作業であろう。

印度からはじまった禅の歴史が、中国、韓国、日本、このごろはアメリカとヨーロッパまで広がることができるのは、禅の普遍性のためではないかと思われる。しかし、現代社会は解決しなければならないいろんな問題をもっている。そのなかで、ひとつはさまざまな宗教や理念の差に因る葛藤である。またひとつは、科学技術の発展に伴う精神文化の未開発による苦しみであると思われる。それらの問題を解決しようとする方法はいろいろあるが、仏教の立場から見れば、いかなる理念や教理をも越えて、心されあれば可能である禅が唯一の鍵ではなかろう

か。そこで、禅の国際化と私の役割について考えてみたいと思う。

現代社会には、様々な宗教と理念が存在するが、各々自分の宗教だけが本物であるとして、他の宗教は迷信という。そのために、世界のあちこちに戦争や深刻な民族問題が起きている。しかし、宗教の究極の目標は、人間が人間らしく生きることではなかったか。しかして、人間は自ら自分自身が造った理念の絆によって苦しみを受けている。その理由は執着するからである。すなわち、〝これは我のものである〟とか〝こうでなければならない〟という執着によるものである。

仏教は、無我の教えであり、我というものはないと説く、つまり、この現象界は、ある条件の中で一つ一つのものが集まって出来たのであり、一つ一つが離散すれば世界はない。いろいろなものが集まって出来たのだから、調和し、融合しなければならないのである。

禅の修行は捨てることから始まる。今までこれが我と考えたものも、我のものと考えたものも善いことさえも捨てなければならない。捨てる間に真の自分の姿を発見することが出来る。真の自分を発見すれば、今までの苦しみと葛藤が、自分の考えからはじまったことも分かるし、

全てのことが自他の区別を超えて平等に見えて来るのである。

次に、科学技術の発達に伴う問題であるが、科学技術の発展と物質文明は、現代人に豊かな生活を保証してくれた。しかし、このために人間が犠牲にされ、苦しみを受けていることも事実ではないか。例えば、人間の造った核が人類の生命を脅かし、産業の発展は公害を伴い、無数の生命を奪った。物質は、人間が生きるために不可欠な要件であるが、文明を造るのも人間であり、利用するのも人間である。だから人間に利益をもたらすか害をもたらすかは、その利用の仕方次第ではなかろうか。

仏典には「牛が水を飲めば牛乳をつくるが、毒蛇が水を飲めば毒をつくる」とある。これは同じ物でも利用する方法によって結果が違うことを示している。

現代社会の問題は、過度な物質文明の発展に精神文化の発展が伴わないことからはじまった。そこで物質と精神の調和のとれた発展が必要と思われる。

このことで、仏教には不二思想と中道思想がある。これはいろいろな意味を含んでいるが、根本的に物質と精神の融合と調和を表している。釈尊が成道以前、苦行主義を捨てて、修行主義を選んだのは心と身、すなわち精神と肉体とか別々なものではなく、不可分な関係にあって適度に調和していると考えたからである。だから、禅は健全な身体に伴う高度な精神文化である。そこで、現代社会にあって、禅文化の開発と普及とが、物質と精神の均衡を保って正しく発展することに寄与する。

これ等二つの面で、禅の国際化について私の役割を三つに要約してみたいと思う。

第一に、私が日本に留学して如来蔵思想について勉強したいと思った理由は、如来蔵思想に

通じて人々を禅の世界に接近させたいと思ったからである。今まで大部分の人々は、禅の修行は出家した僧侶と特別な人々だけがすることだと考えている。しかし、禅の立場から見れば、禅について沢山のことを知っていても、実行しなければ自分のものではない。だから、誰でもまず実行すべきなのである。

また、人々が禅の修行は難しいと考える理由はいろいろあるが、最大の理由は仏に成るのが不可能であると考えていることにあると思う。しかし、如来蔵思想は「一切衆性悉有仏性」を示し、衆生の心そのものが、素晴らしい仏の心と同じであることを強調している。

そこで私は、人々に自分の心が仏の心と同じことを確信させて、禅の世界に入らせたいと思い、如来蔵思想を学ぶことを考えた。

二番目は、禅文化の開発である。昔の中国と韓国と日本との文化は、禅文化そのものであったが、今はインスタント食品に代表される便利な技術文明のために、その風潮はほとんど失われてしまったのではないだろうか。例えば、茶道や書道などを、急速に変わる現代社会にあわないと考えるかもしれないが、動中静の妙味が禅文化の生命であったのではなかろうか。日本の諺の中に「急がば廻れ」というのがある。忙しい現代社会こそ余白を造る禅文化の開発が必要と思う。

最後に、我々が国際化という言葉を聞く時、すぐアメリカとかヨーロッパを思い起こすことである。勿論、それ等の国に禅を伝えるのも重要だが、私達が忘れてならないのは、第三世界ではないだろうか。今の第三世界の国々は、文明の開発に熱心である。また、キリスト教の普及と民族宗教との葛藤もある。そこで我々は、アメリカ、ヨーロッパ諸国と共に、第三世界にも関心を持たなければならないと思う。

ご寄付御礼

〈海外留学僧派遣育英会〉

中村治雄・茂子殿　五十万円
北尾　武殿　三十万円
トーヨコKK殿　三十万円
三宮　憲定殿　三十万円
安藤　康哉殿　二十万円
大粒未和夫殿　十万円
金田　親男殿　十万円
芦辺　鎌禅殿　五万円
吉田　修殿　五万円
石川　征一殿　五万円
今泉　源田殿　三万円
佐々木弘傳殿　三万円
桜井　宗梅殿　三万円
小川　先生殿　三万円
龍澤　武雄殿　三万円
赫多　正円殿　二万円
繁里　剛殿　二万円
鈴木　たか殿　二万円
昼間　光威殿　一万円
小川　勝殿　一万円
太田　好信殿　一万円
瀧澤　卓也殿　一万円
中畑　勝善殿　一万円
山本喜代司殿　一万円
内海　忠男殿　一万円
石山千佳子殿　一万円
福田　道子殿　一万円
侯　曄殿　一万円
岩井　正明殿　五千円
小山内雅徳殿　五千円
越前　竹子殿　五千円
宮下　白蘭殿　五千円

〈成寿賛助〉

渡辺　清孝殿　三万円
伊藤　勳殿　三万円
柴田　秀晃殿　二万円
横尾　太寿殿　二万円
町田　恒蔵殿　二万円
桜井　宗梅殿　二万円
阿部　慈園殿　二万円
原　清殿　一万円
渡辺　秀雄殿　一万円
茅野総一郎殿　一万円
力石　一郎殿　一万円
奥山　大観殿　一万円
安居　太道殿　一万円
蓮蔵栄治雄殿　一万円
芦辺　鎌禅殿　一万円
井桁　雄弘殿　一万円
島屋原百合子殿　一万円
宮下　博一殿　一万円
伴　鉄　牛殿　五千円
内田　寿園殿　五千円

「海外留学僧派遣育英会」ならびに「成寿」に、上記の方々よりご寄付をいただきました。心からお礼申し上げます。

善光寺だより

胸を打つ講演

五月二十八日、恒例の身代り不動明王の大祭並びに大般若会法要が行われた。

講演される萩生田先生

午前十一時より善光寺不動殿において、佐藤俊明師を導師とする祈禱会の後、女優・萩生田千津子先生が講演された。

萩生田先生は、昭和五十八年八月、交通事故で首の骨を折り、頸髄損傷による全身麻痺で車椅子の身となった。

必死のリハビリテーションにより、どうにか自力で車椅子には乗れるようになったものの、医師から「再起不能」の宣告をされ、沈んでいたある日、作家・水上勉先生の訪問を受けた。

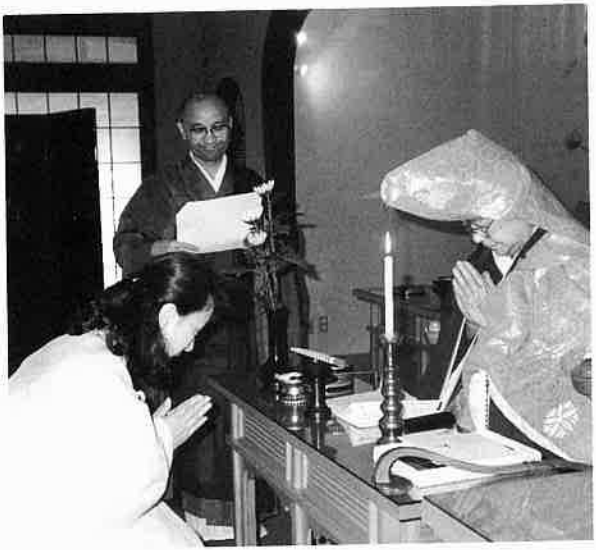
「世の中にクズはない。要らんものなど一つもない。声が残っているじゃないか」という水上先生の強い勧めにより、萩生田先生は「語り部」として復帰された。

肩から下の感覚は今も無く、肺も閉じ、腹筋も働いていないお体ではあるが、さまざまな出会いを大切に、感謝の心を失わず、前向きに生きていらっしゃる萩生田先生のお話に、一同心

を打たれた。

育英会の洪さんが得度

育英会の第四回生、洪淳海さん（韓国）が五月十日、善光寺釈迦殿において得度した。



供さんの得度式

式典は、曹洞宗龍光寺住職の佐藤俊明師を戒師として、善光寺関係者十数人の他、洪さんの友人二人が参列、厳粛に執り行われた。

洪さんは昭和六十年から六十三年にかけて東京大学大学院宗教学科に留学、最終年度になって海外留学僧派遣育英会を知り、「中道実践の〝正〟観に関する一考察」と題する論文を提出、入選して第四回生となり給費を受けた。

四月、黒田理事長と佐藤常任理事が訪韓した際、洪さんが日頃考えていることを聞いた黒田理事長の、在家得度を受けては、という言葉に得度を決意したという。

安名（＝法名）は、入選論文の題名から「正」をとり、黒田理事長の道号「大圓」から一字を、佐藤師の名前から「明」を、そして本人の名前から「淳」をとり、「正圓明淳」との名が授与された。

奈良・信貴山で断食修行

黒田住職は、奈良県生駒郡の信貴山断食道場に籠もり、断食修行による肉体の浄化と精神の修養に専念した。

断食行は、生命と意識を整え回復させる自然の法則であると言われ、黒田住職も断食によって、精神的にも肉体的にも爽やかな充実感を味わっている。

育英会「文藝春秋」で紹介される

善光寺黒田住職が、二千五百の檀家に一口十円として一日三十円、年間一万円の布施をもらい、そのお金で「海外留学僧派遣育英会」の制度を発足させて六年目。この五年間で海外に派遣、又は受け入れた若き僧侶や学者は二十九人。毎年、世界に留学僧を派遣している。「文藝春秋」六月号のグラビア二頁でこのことが大きく紹介された。

（掲載文は次のとおり）

横浜市にある成寿山善光寺の「海外留学僧派遣育英会」が今年で六年目をむかえた。この制度の発案者は住職の黒田武志師（52・写真左）。若い頃にタイ、アメリカなどで修行・布教の旅をした黒田師は、自らの経験から、「世界の言葉を学び、理解してこそ、その国の人々の心を知ることができる。本当の平和はそこから生まれる」

と、この制度を発足させた。とはいえ、一番問題だったのはその資金だった。

「二千五百のお檀家に、一食一口のご飯代十円として一日三十円、年間に一万円を施していただき、その金を育英資金にあてさせてもらっています」（黒田師）

というように檀家の理解と協力なしでは成り立たなかった。

この五年間で海外に派遣、または受け入

れた若き僧侶や学者は二十八人。最初は、「はたして応募者がいるかと心配で胃が痛くなった」そうだが、いっさい宗派にこだわらないという寛容さもあってか、年々希望者は増える一方だ。

今年の育英生は六人でうち三人はここにいる尼僧たち。曹洞宗の沖田玉英さん（33・右から二人目）はアメリカの禅センターで学び、韓国・曹溪宗の金秀娥（キムスア）さん（27・右）は東京大学大学院で如来蔵思想を、陳永裕（チンヨンユウ）さん（37）は駒沢大学大学院で華厳学を研究し、それぞれ文化交流に努めている。

第七回海外留学僧募集について

目　的　大学卒業相当以上の学力を有し、仏教を修学する者のうち、学業操行ともに優秀にして心身堅固なものを海外に派遣し、仏教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る優秀な人材を育成することを目的とする。

派遣先　世界各地

派遣期間　一年間とするも場合により延長するも可

給　費　派遣先までの往復旅費及び滞在に要する必要経費を支給する

募集人員　2～3名

提出書類
(1) 論文　(2) 保証人と連署した願書
(3) 卒業証明書　(4) 履歴書
(5) 推薦書　(6) 健康診断書

提出レポート
●禅の国際化と私の役割　●二一世紀の仏教と私の役割
●タイの仏教に学びたいこと　●未来社会の仏教と私の役割
いずれか一題を選ぶこと、枚数はいずれも四〇〇字詰原稿用紙五～一〇枚

原稿〆切　平成二年十二月十日

善光寺海外留学僧派遣育英会事務局

●読者からのお便り

このたびは「成寿」第十四号を御恵送賜わりまして、心よりご厚礼を申し上げます。

いつもながらのすばらしき誌面、殊にタイ国の記事満載と海外留学僧の国際化時代にふさわしいご活躍の程が察せられ、ご同慶の至極に存じます。

不肖などは田舎の貧寺と学働研究の二足ワラジのいずれも中途半端にて、お恥ずかしき限りですが、同じ宗門人としての夢を着々と実現される善光寺様に限りない敬意を表する次第です。

どうかご法体をおいといの上、ますますご繁栄ご活動のこと心からお念じ申し上げます。

千葉県東葛飾郡龍泉院　**椎名　宏**

「成寿」第十四巻、巻頭のタイ仏教カラー写真集は圧巻でした。約二十年前に仏蹟を訪れ、インド・ネパール、空名化した仏教に驚嘆し、タイの現実に生きる仏教に感激して帰国した、当時の気持が甦って参りました。

毎号立派になり、企画・編集のご努力が読者に身にしみて感ぜられました。信者にとってはこの上ない贈り物と存じます。

今後の益々のご発展と、貴山のご繁栄を祈念致します。

浦和市　**阿部　肇一**

「文芸春秋」をご恵送賜わり、ありがとうございました。

ご老師様の尊く、高邁なるご事業が普く人々の心に自覚され、実践を通して「宗教の何たるか」をお導き頂いておられる姿に接し、改めて敬服致しました。

今後共この「留学僧派遣育英会」がますます発展されますよう、心から祈念申し上げます。

横浜市鶴見区　**落合　一恵**

海外留学僧育英会の件、「文芸春秋」六月号グラビアを拝見致しました。

募集掲示を本学の告知板にも現在貼付中でございますが、多くの学生が足を止めて見ております。それだけ高く評価されます事業ですし、21世紀を見つめた文化交流と思います。

黒田さん自身がパリ大学で発表なさいましたご高論が出版されましたので、一度お礼を兼ねて持参申し上げます。

横浜市緑区　**石澤　良昭**

今回「成寿」誌をご恵送賜わりありがとうございました。

特に、海外留学僧に大正大学関係ご採用頂いて感謝にたえません。お志を奉じ、良い修行を致すと存じます。

同誌にはタイの仏教事情がすばらしい写真とともに編集され、一度しか訪れた事のない愚生は、とても参考になりました。まずはお礼まで。

〝お水取格子へだてて　青衣の人〟（竜）

東京都港区　浄土宗天光院　**真野　龍海**

成寿の中で、黒田さんと佐藤老師のお写真を拝見して筆をとりました。小生も三菱石油から京極運輸に移り、毎日元気で過ごしております。

黒田さんの警策が忘れられず、月に一度は大船観音寺で参禅しております。

海外留学僧のお仕事は本当に立派な事だと思います。皆々様のご健闘切にお祈りしております。

茅ケ崎市　**波多野収通**

海外派遣育英会も益々隆盛、第七回募集のご案内を拝見し、既に二十八名も送り出しておられる実績は誰もマネのできない偉業、理解すら困難です。

立派な教育者、顧問の頂点にある先生の存在感は、立派な哲学と犠牲心のみに賜わる尊いものと感服するばかりです。

文芸春秋拝見させて頂きました。いよいよさらにあらゆる層に広く深く知られるところとなり一大事であります。

大企業か本山なら納得もさせられます。

が、横浜日野の善光寺。でしょう、先生。まさしく身を削り、人に尽くさん、哲学の撤して、何でもやってのけてしまわれるのでありますから、先生の威力、唯ただ恐れ入るばかり、天上も見えず、底も見えません。

みんなにも見て頂きました。

高槻市　**東郷　敏**

成寿第十四巻、美しい写真を堪能させて頂きました。特に、形山記者と駒沢氏の記事によりタイ国仏教事情を知ることができ、勉強になりました。

それにつけても日本仏教事情のおぞましさが浮き彫りにされて、膚に粟を生ずる感がつのるばかりです。だが、貴寺より派遣されて研修している留学生が、帰国して日本の仏教にカンフル注射をして下さることを期待しております。

東京都新宿区　**飯田　利行**

今までは〝留学僧派遣の意義〟に重点をおいてきました。

これからは、食事のひとくちを献じることで仏教興隆の大事業に参加できるありがたさ、よろこびにも焦点をあてていきたいと思います。

事務的・義務的な寄付ではなく、三拝九拝して〝させていただく〟心こそ浄財の核心と信じます。

宗派をこえた大事業が、仏教史の

上でいかにすばらしいことであるかを理解すれば、おのずと檀徒の感謝と喜びが生まれることでしょう。
大事業は、目先ですぐに分かるというものではありません。
これを見通す広い心、子々孫々まで広がる大事業を理解する知恵、正にこれこそは、仏陀に通じる道だと思います。

赤間　義徳

このたびは立派な御書をお送り下され、誠にありがとうございました。
お陰様で小生もこのたびの海部内閣の発足により、通商産業政務次官を拝命されました。内外文字通り多事多難の折、懸命に国務に精励致して参りますが、多忙の中にあり御書を拝読させて頂き、心の支え、やすらぎを感じさせて頂きました。
誠にありがたく厚くお礼申し上げます。

川崎市　参議院議員　**斎藤　文夫**

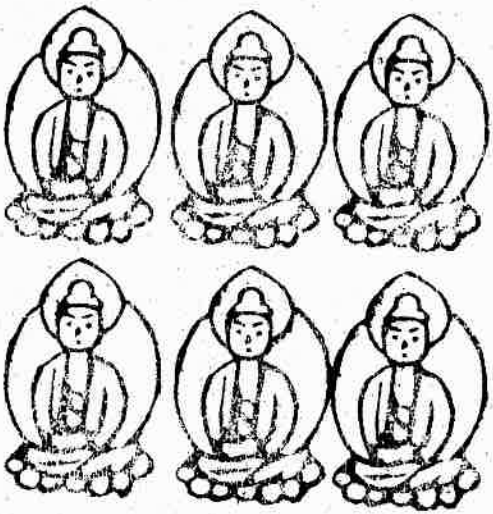
春季号のタイ特集は胸迫るものがありました。お写真による浄らかな美しい風景や、合掌する人々を見ておりますと、阿弥陀仏の本願に触れたような宇宙的な時空を超えた不思議な懐かしさを覚えます。
善光寺様には開創二十周年を昨年お迎えになり、育英会には名誉顧問に山田天台座主のご就任を得られました事、心からお慶び申し上げます。
黒田方丈様の願いをこめて蒔かれた種は美しく花開き、思いもかけない大きな実を結ぶことでございましょう。
ますますのご発展をお祈り致します。

北九州市　鳥屋原百合子

文芸春秋及び善光寺海外留学僧派遣育英会誌をご恵送下され、善光寺の全貌が分かりました。
一食一口十円のお布施で世界に留学僧を！の写真を拝見して感激致しております。
平成二年で第六回も海外に派遣されていることを知り、驚きと感激で胸が一杯です。黒田師の仏教界を思い、国を思い、全人類を思う心に私も共感を覚えます。
又、成寿第十四巻、ロイ・カトーンの祭り、タイ国にみる供養のすがたを読み、三宝供養の心と放生の言葉を知らない日本の国が恥ずかしく思えました。
人生は修行の場、断食指導を通じて、義と愛の心を普及して行きたいと念願致しております。
次に山田長政の墓は、是非建立計画を実現させて下さいませ。日本の歴史の上からも、是非実現させなければならんと思います。計画進展すればお知らせ下さいませ。

奈良県生駒郡　信貴山断食道場

吉田　修



Let's Be Old Friends As We Were

The tall, slender, beautiful statue of the Kudara kannon in the Taihoden of Horyuji Temple is said to have been introduced as the name denotes, from the ancient country of Kudara on the Korea Peninsula. In the ancient days, Chinese cultures including Buddhism were introduced into Japan through Korea to greatly affect the formation of the cultures of ancient Japan. Korea was, so to speak, an elder brother country to Japan in this sense.

Geometrically, however, the Korea Peninsula lies as if a dagger pointed close to the side of the Japanese Islands. Japan therefore treated the Peninsula as the strategic key point to check the down invasion of the power from the mainland China. Contrary to the inflow streams of the cultures, Japan regarded it necessary to use the Peninsula as a national defense breakwater.

Retrospecting only a century ago, disregarding things in hundreds of years ago, we see Japan took such national safety and security policies including the "Conquer Korea" arguments in 1973 and the Japan-Korea Amalgamation Treaty in 1907 which intended to safeguard Japan at the sacrifice of Korea.

Consequently, Japan and Korea, though located very close to each other with only a strip of water between them, have since then been desperately unhappy, remote neighbors to each other.

Quite recentry, the hard feeling between the two nations has begun to melt. The exchange of the latest visit of the Korean President to Japan and the address of the Japan's Emperor to the President representing the Korean people has placed a significant mark of new friendship to be developed hereafter between the two neighboring nations. It is indeed greatly pleasant to imagine the growth of familiar friendship in all of us as old intimate neighbors.

Now, the Zenkoji Scholarship Society for Priestly Study Abroad has relations with 5 Koreans. With the support of the Scholarship Society, three Koreans are studying in Japan, one priest from Japan is studying in Korea, and another one who fulfilled the Scholarship study is now active in Seoul and has recently enterd the Buddhist priesthood at home under the guide of Rev. Sato.

In the course of this small stream of our Japan-Korea Buddhist exchange, I had an opportunity of visiting Korea in mid April. It was a really significant trip to me, renewing my mind to be of further assistance to the development of Japan-Korea Buddhist relations. This issue, therefore, features articles on Korean Buddhism to be read by as many readers as possible.

Let us endeavor to change neighboring remote strangers to friendly close neighbors.

編集後記

▼梅雨の時期に雨が少なく、きびしい夏の暑さで水を心配しておりましたが無事のりきることができました。

▼成寿十五（秋季）号をお送りいたします。

▼四月に理事長、佐藤常務理事、写真家駒澤晃氏、山口善光寺青年会長の四名で韓国の仏教取材をしてまいりました。ちょうど桜が満開で大変美しい隣国を訪れることができました。又、御多忙な鎌田先生に玉稿を頂き厚く御礼申し上げます。特集をご一読下さい。

▼五月二十八日の不動明王大祭には車椅子の女優萩生田千津子先生をお迎えし、講演をいただき檀信徒一同、感激いたしました。今後のご活躍をお祈りいたします。

▼七月三・四日の両日にわたり、盂蘭盆法要がとり行われ、初盆の方々のご供養とご先祖様のご供養、そして施食会を厳修いたしました。また柵経も無事円成できました。

▼九月の秋彼岸会には「死者は生きている」の著者萩原玄明先生の法話を予定いたしております。皆様のご参詣をお待ちいたしております。

▼昭和六十二年十二月「宗教とアジア社会」セミナーがフランスのパリ第一大学で開かれ、日本仏教界を代表して理事長が「新しい寺院経営を求めて十五年の軌跡とその成果」のテーマで善光寺の教化、運営を発表しました。このたびその講演の内容がフランス語版で出版されました。世界各地の大学におさめられるとのことです。

▼第六回派遣僧入選論文を掲載いたしました。海外生活を通して広く世界に活眼を開く人材育成の重要性を痛感いたしております。

▼第十六号はスリランカ、カンボジアのアンコールワット特集を予定しております。檀信徒の皆様には寺の護持にご尽力をいただき感謝いたしております。

成寿　第十五号
平成二年九月一日発行
発行所　成寿山善光寺
横浜市港南区日野町一六〇四
電話　〇四五（八四五）一三七一
印刷所　神奈川新聞社出版局

横浜善光寺